１．議事日程

〔令和２年第３回安芸高田市議会９月定例会第１６日目〕

令和２年　　９月２５日
午 前 １ ０ 時 開 会
於　　安芸高田市議場

日程第１　　会議録署名議員の指名
日程第２　　一般質問

２．出席議員は次のとおりである。（１５名）

１番	武 岡 隆 文	２番	新 田 和 明
３番	芦 田 宏 治	４番	玉 井 直 子
５番	山 根 温 子	６番	前 重 昌 敬
７番	石 飛 慶 久	８番	児 玉 史 則
９番	大 下 正 幸	１２番	熊 高 昌 三
１３番	宍 戸 邦 夫	１４番	秋 田 雅 朝
１５番	塚 本 近	１７番	金 行 哲 昭
１８番	山 本 優		

３．欠席議員は次のとおりである（なし）

４．会議録署名議員

１番	武 岡 隆 文	２番	新 田 和 明

５．地方自治法第１２１条により説明のため出席した者の職氏名（１４名）

市長	石 丸 伸 二	教育長	永 井 初 男
総務部長	西 岡 保 典	企画振興部長	猪 掛 公 詩
市民部長	宮 本 智 雄	福祉保健部長兼福祉事務所長	大 田 雄 司
産業振興部長	重 永 充 浩	産業振興部特命担当部長	行 森 俊 荘
建設部長兼公営企業部長	平 野 良 生	教育次長	福 井 正
消防長	土 井 実貴男	総務課長	内 藤 道 也
財政課長	高 藤 誠	政策企画課長	河 本 圭 司

６．職務のため議場に出席した事務局の職氏名（４名）

事務局長	森 岡 雅 昭	事務局次長	佐々木 浩 人

総　務　係　長　　國　岡　浩　祐　　主　任　主　事　　岡　　憲　一

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

午前１０時００分　開議

○山 本 議 長　　皆さんおはようございます。

定刻になりました。

ただいまの出席議員は15名であります。

定足数に達しておりますので、直ちに本日の会議を開きます。

本日の議事日程は、あらかじめお手元に配付したとおりであります。

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

日程第１　会議録署名議員の指名

○山 本 議 長　　日程第1、会議録署名議員の指名を行います。

会議録署名議員は、会議規則第86条の規定により、議長において1番　武岡隆文君、及び2番　新田和明君を指名いたします。

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

日程第２　一般質問

○山 本 議 長　　日程第2、昨日に引き続き一般質問を行います。

一般質問の順序は通告順といたします。

それでは質問の通告がありますので、順次発言を許します。

14番　秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　　おはようございます。

14番、秋田雅朝でございます。

通告書に基づきまして、大枠1点、所信表明について4項目お伺いいたします。

石丸市長におかれましては、昨日に続いての一般質問でございます。昨日の6名の質問者に対する答弁は、爽やかで分かりやすい答弁、昨日教育長さんのほうからもございましたけれども、さすがだなというふうに感じさせていただいております。

それに対し、私は本当に久しぶりにトップバッターということで、非常に小心者でございまして、緊張しております。市長に対しまして、負けず劣らず一生懸命質問させていただきますので、どうかよろしくお願いいたします。

市長は、所信表明において、新しい安芸高田市をつくるには、その一つとして、持続可能なまちづくりの推進を掲げておられ、そのためには、あらゆる施策の費用対効果の再検証に基づき、客観的な視点等での施策推進を表明されておられます。また、目指すところは、これまでを振り返り、これからを考えて、世界で一番住みたいまちとも述べられておられます。

私もこの所信については、大いに共感いたすものであり、この実現が未来につながる安芸高田市のまちづくりと思っているところでございます。

そこで、この実現に向けて、基本方針2項目と個別方針7項目を表明されておられますが、今後の取組における認識の共有という観点から、次

の質問をさせていただきます。

まず、1点目でございます。教育の推進についてでございます。

確かな学力を身につけさせることと、総合的な生きる力を高められるよう、教育の質の追及を掲げておられますが、既に取り組んでいる安芸高田市学力向上戦略との整合性を含め、具体的な市長の見解をお伺いいたします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　おはようございます。

教育の推進についての御質問にお答えします。

子供たちがこれから生きていく社会、未来社会というのは、予測がとても難しい、変化の激しい時代となります。例えば、このたびの新型コロナウイルス感染症、これがそうであるように、これまで経験したことのない課題、それと向き合って対応していく力が必要です。

その意味では、先ほど御指摘をいただきました、安芸高田市学力向上戦略も同様の方向性を持っていると、整合性がしっかりあるという認識でいます。

取組の現状としましては、例えば電子黒板やタブレットといったＩＴ機器、その辺り、ハード面の整備に現在取り組んでいます。

同時に、従来の教師が主導して、教え込んでいた授業、ここから子供たちが中心となって、対話の中で主体的に学んでいく授業、こちらに転換していくなど、ソフト面での変革も進めていく考えです。

子供たちが学力を軸としながら、総合的な生きる力が身につけられるよう、改革に取り組んでいきたいと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　ただいま答弁をいただきましたが、安芸高田市学力向上戦略は、新市長もお考えになられるところでは、市長が思われていることと同様の方向性を持っていると。それからということになると、これは教育の、これから取組をされる中では、整合性があるんだという答弁だったというふうに思います。

この質問は、未来を担う子供たちの教育ということで、教育に費用対効果を求めることは、なかなか難しいと私は考えておりますが、未来への投資、最重要課題ということから市長の見解をお伺いいたしました。

広報あきたかた10月号でも、「安芸高田市をどんな町にしていきましょうか。」という問いに対して、「最終的にはＩＣＴの利活用などで、部分的にでも、都市部を上回る教育を提供することは可能です。」というふうに答えられております。

このことからしても、新市長、教育に力を入れていかれるのかなというふうに、つくづく感じているところでございます。

一方、本年3月に、安芸高田市が育てたい、目指す子供像を示された、

未来に生きる力を育む安芸高田市学力向上戦略を改定され、本市の全ての学校で本戦略を踏まえた取組を組織的に進めていきたいということで、今日に至っていると認識いたしております。

石丸市長におかれましては、この学力向上戦略については、十分認識されていると思いますが、この中にも掲げてあります子供たちに未来社会を切り開くための資質、能力を育成するためには、新しい時代を見据えた教育を創造する必要があり、小学校では2020年、今年度、中学校では、2021年に新たな学習指導要領の全面実施という大きな節目で、社会に開かれた教育課程により、学校と地域社会が連携、協働しながら、子供を育むという方向性が示されています。

この実現には、子供たちを支える教師、教職員も含め、市長と教育長をはじめとした、教育委員会が確かな連携の下で、施策展開を図っていただきたいと、このように私は考えております。

また、市長は先般の新聞記事だったと思うんですが、校長会等にも参加されているというふうに伺っております。そのことも踏まえながら、こうした連携を大切にしていただきたいという思いの中で、市長のこうした取組、見解について、再度お伺いしたいと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　この教育の現場とそれ以外のところで多方面にわたるかと思うんですが、それとの連携についてお答えさせていただきます。

まず、この教育ですね、これから何を目指すのかと、この認識をそろえるのが大事、必要だと思っています。先ほど、向上戦略にうたってある中身、私もいろいろと読んではみたんですけれども、いいなと思ったのが、ああしなさい、こうしなさいという細かいところは書いてないんですね。とても大事な基礎のベースの部分を提供するんだと。子供たちに渡してあげるんだという発想になってます。

その意味では、子供たちに私たちが教えてあげる、示すべきものは、皆さんはどこへでも行けるんだと、何にでもなれるんだと、その可能性だと思ってます。

先ほど、御質問の中で、費用対効果、その検証が難しいんではないかという御指摘がありました。全くそのとおりです。ただ、これはいいほうで検証ができません。なぜか。費用対効果。片仮名で言えば、コストパフォーマンスです。コストのほうは簡単に計算できます。お金が幾らかかったか、幾ら使うのか。でも、パフォーマンス、これが測れないんです、教育は。先ほどの言葉とつなげれば、子供たちがこれからどこに行って何をやるのか。誰も分かりません。可能性が無限大なんです。

であるならば、コストパフォーマンス、この世にある、ありとあらゆる事業の中で、一番コスパがいいのは、私は教育だと考えています。その認識の下で、いろいろなところで連携を進めていきたいと思っているんですけれども。その上で重要な視点というのは、教育の現場、これは

もちろん教職員の方であったり、教育委員会であったり。当然、当事者の子供たちもいます。そこには保護者の方々、いらっしゃるんですが、それにとどまらないと思っています。

教育委員会のつながりでいえば、行政ですね。ここからの支援、体制の整備というのも必要になってくると思いますし、もっと私がこの町、安芸高田市ならではの取組、力を入れたいなと思っているのは、地域という視点です。当事者といえば、子供、先生、親、とどうしてもイメージが固まりがちなんですが、それだけじゃないでしょと。町として、地域として、子供たちを育てていく。なんたって可能性が無限大なんですから。これは必要な社会にとって、十分意味のある投資だというふうに捉えていますので、その意識でいろんなところと手を取り合って、取り組んでいきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　ただいまの答弁で、地域との関わりを中心に、地域とともに子供たちを育てていきたいという答弁をいただきました。まさしく、今後安芸高田市が取り組むコミュニティスクール、ここを大切にしながら、教育委員会との連携を図りつつ、ぜひともそういった取組に、重点的に力を入れていただきたいと思います。

それでもう1点、確かな学力を身につけさせるということで、少しお伺いをしたいと思います。

先般の予算決算常任委員会で、小中学校の基礎学力が定着している割合ということで、小学校63.5%、中学校は50.4%という実績値を掲げられ、課題として改定安芸高田市学力向上戦略に基づき、授業改善と児童生徒に確かな学力を定着させる取組をさらに推進する必要があると書かれております。ということに対し、そのとき、同僚議員も質問をされたと思うんですが、石丸市長さんとしては、この数値も含めて、この実態をどのように受け止められて、今後どのように展開をされていくのか、再度お伺いしたいと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　確かな学力に関する御質問にお答えします。

まず何をもって確かな学力とするのか、その定義の議論はいろいろあったというふうに承知をしています。現在では、その相対的な目線というものが定められています。広島県のトップレベル、トップクラスの学力というような文言もあったように思うんですけれども。この相対的な水準を目指すのは、実は結構難しいんじゃないかなと思ってます。なぜならば、周りが上がれば、当然より競争が、競合が激しくなりますので、掲げるのは、追及するのはいいんですけれども、ついぞかなわないまま、というのもあり得るんじゃないなと思ってます。

その意味では、もう少し確かなところでは、絶対水準です。これとこ

れとこれができたらいいんじゃないかなと、より分かりやすく具体的な水準というのがあってもいいようには思ってます。

ただ、何より私がこの目標を掲げて、推進していくにあたって、課題じゃないかなと思っているのは、この町で高い水準の教育を提供しますと。例えば、仮に県内トップだと言うんであれば、それを提供し得る体制が必要になってきます。ちょっと教育現場のほうから、お叱りを受けそうではあるんですが、端的に言えば、県内トップの覚悟が教職員に必要になってきます。この意識改革はかなり難しいものだと思うんですが、私はその目標を掲げていること自体は、大いに賛成ですので、この課題、難題ではあるんですけれども、何とか少しずつでも、進めていきたいと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　今市長の答弁、相対的な水準という言葉が出てきて、それから前々市長から受け継がれた、その県内トップレベルの学力、ここも目指すということの中で、やっぱり教職員さんの質も含めて、全体で取り組むという答弁だったと思います。

私も今までも学力について質問させていただきましたが、学力が全てとは思っていません。しかし、低いよりは高いほうがいい。高いほうに進めるにはどうしたらいいか。そこを教育委員会も含めて、教職員の方も含めて、しっかり議論しながら、それを地域の方と共通認識を持って進めていくことが、教育のレベルアップに私はつながると思うんで、ぜひとも少し長い目で見られて、すぐにどうこうできる問題ではないと思うんですが、そうした取組を、この1期4年の間で、しっかり考えていただきながら、進めていただきたいというふうに思います。

次の質問に移ります。

2番目の医療体制についてでございます。

本市における重要課題の一つとして私は認識いたしておりますが、とりわけ遠隔医療等について、ＩＣＴ技術の活用による医療機関と連携した取組を進めるとされていますが、このことについて目標とされている時期など、どのように想定されているのか、見解をお伺いいたします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　医療体制についての御質問にお答えします。

御指摘をいただきました遠隔医療体制の整備なんですけれども、お答えとして、結論としては、令和2年度末ですので、今年度末、そちらを目標に進めている状態です。

少し説明を加えますと、これによって公共交通機関が少なく、高齢者が多いこの本市においては、受診機会を確保することができるようになります。

ただ、課題としましては、医療は対面の診療が原則となっていまして、

提供できる医療には、やはり限界があります。また、法律上、様々な制約もありますし、医師の負担も増加すると見込まれます。この先、高齢化が進む、この安芸高田市、その将来を見据えて、各医師会等と連携を取りながら、この医療体制の整備を進めていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　この質問、医療体制の充実は、市長が掲げておられます、持続可能なまちづくりに大きくつながってまいると、そのように私は認識いたしております。そうしたことを含めて質問させていただきました。想定させていただいていた答弁が年内の実施に向けての方向性は話されましたが、内容的に例えばお太助フォンの活用とか、あるいは吉田病院との連携ということなので、先生方との協議の下に、パソコンを通じた遠隔医療になるものなのか。そこら辺りが少し聞きたかったところなんですが。

それはそれとして、今後こうした医療体制の充実に取り組んでいかれるということの中で、9月13日の中国新聞報道で、昨日の同僚議員の質問にもございました、2021年3月末で期限切れとなる過疎法ですが、これに代わる新法案の概要というのが出ておりました。その中で、過疎地支援、遠隔医療など推進という見出しで、デジタル技術による遠隔医療、遠隔教育などを重点分野と位置づけ、財政支援を強化する。期限は、2031年3月までの10年間として、載っており、新法案は、豊かな自然環境や安らぎのあるライフスタイルを持つ過疎地の持続的発展を新たな理念とするというものでございました。

また、先般の予算決算常任委員会、補正予算でしたけれども、新型コロナ対策として、オンライン診療体制整備補助金が計上されていたので、どういった取組をされるのかなということでお伺いしました。この国の財政支援、まだ新法ですので、来年度以降の成立になると思うんですが、10年間、31年までという10年間という期限があるので、しっかりと本当に遠隔医療とはどういうものなのか。あるいはどういう課題があるのか。そうしたことを特に吉田病院等病院と連携を図り、話をしていただきながら、この施策を活用していただいて、取り組んでいただきたいというふうに考えますが、少し長い目の話になりますが、市長のお考えを再度伺います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　まず眠たくならないような答弁にしないといけないなと、今改めておのれを奮い立たせているところであります。

過疎法に関する御質問なんですけれども、まずその新過疎法ですが、これの帰着もどうなるところかというのはあります。一方で、今御紹介をいただきました医療や教育に関する過疎対策、これがようやく本腰を入れてもらえるようになったんだなと思ってます。過疎の、地方の衰退の問題というのは、やはり医療や教育だという認識でいます。人がどん

どん抜けていきますので、それまで公に公共が提供していた、公共サービス、これが維持しにくくなっていくというのがこの過疎化、人口減少の問題の最たるところだという認識でいますが、そこにちゃんと目的を明確にして、支援がしっかりと打ち出されていく、この流れはすごく歓迎すべきところだと思っています。

まだとらぬタヌキのではないんですけれども、これから先の話ではあるんですけれども、やはりこの町の医療であったり、教育であったり、その課題が何なのか。これをしっかりと把握するところから始めていきたいと思ってますので、その意味では医療であり、教育の現場ですね。そこへのヒアリング、意見交換というのはしっかりと取り組みたいと考えています。

もし補足があればお願いします。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　本当に長い目の話をしてしまって申し訳ないとは思うんですが、でも現実問題は高齢者対策の一つはこの医療問題だと私は思っておりますので、ぜひともしっかりとした連携協議をしていただいて、方向性をしっかり出していただき、また議会等の議論をさせていただければというふうに思いますので、よろしくお願いいたします。

次の質問に移ります。

3番目です。社会インフラの利便性の向上についてでございます。

上水道整備について、地域によっては、ボーリングによる井戸水対応がなされ、整備を望まれている現状がございます。住みたい町を目指すには、こうした課題の解消も必要と考えますが、市長の長期スパンも想定した見解をお伺いいたします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　社会インフラ、特に水道関連に関する御質問にお答えします。

人が生活をしていく上で、水、水道というのは極めて重要です。ですので、この水道関連、とても大事なインフラだと認識しています。これからも、安全であり、安心な水を安定的に供給していく、これは市の務めだと思っています。

もっとも、現在稼働しています施設の老朽化、それから先ほども言及しましたが、人口の減少、これによって水需要は変化していきますので、水道を取り巻く環境、かなり大枠なんですけれども、これも時代の流れとともに変わっていくものです。今後については、施設の再整備、これに併せて給水地域の拡張等を検討していきたいと思っています。

ただ、もう少し付け加えるならば、やはり長期のスパン、長い目で見たときの方向性としては、よくある言葉ではあるんですが、コンパクトシティ、その発想も重要に、必要になってくるんではないかと思っています。特にこの安芸高田という市は、もともと6つの町が合わさって、

できた市ですので、非常に広大な面積を抱えています。この広い土地そのものが、実は町の発展にとっては、なかなか御しがたい課題と、ボトルネックになっている面がありますので、それを超えていく、解消する一つのアイデアとしてはコンパクトシティで、ぎゅっと町の機能を集約していく、その取組も検討が必要なんではないかと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　市長の答弁、水需要は変化するということでございます。と同時に、生活には絶対欠かせないんだと、重要なインフラ整備だというふうに認識していらっしゃると察しさせていただきます。

私、長期スパンということもここに書いておりますけれども、市長はコンパクトシティという考え方での対応ということだったと思うんです。少しその話とは、観点とは離れるかも分からんのですが、この質問につきましては、平成20年以来、浜田市長さんのときから何度か質問させていただいた経緯がございます。この質問事項を、水道未普及地域解消の取組について、というふうにして、市長に見解、取組について何度か市民の声を基にお伺いした経緯があります。まだ、市内には、御承知のように給水整備がされていないところが数か所あるというふうに今でも認識はしておりますし、市長もそこら辺りは少し認識をしていただきたいなと思うんです。それはそれで、井戸対応で今取組はされていらっしゃるのは現実ですし、困っていないと言えば、そういうところもあるかも分からんですが、これが長期的な目で見たときには、課題が出てくるんじゃないかということで、改めて質問をさせていただいとるところで、高宮でもお父様の住んでおられる地域も恐らくそれはできてないと思います。それから、美土里にも数件ございます。そこら辺り、お話をお父様にお聞きになって、また考えていただきたいところもございます。

ともあれ、これは財政が伴う事業でございます。取組が困難であるというふうにも私は何度も質問をさせていただいて認識はしております。昨日の一般質問の答弁でも、必要最小限のインフラ整備はするというふうにも答えられたと思っておりますので、ボーリング対応で、頑張っておられる地域も、これは永久的に対応できるかというと、今申しましたように疑問を感じているところもあります。

何よりも、現在、産業建設常任委員会所管の広島県水道広域連携について、平成30年から何度か報告事項として、資料も提供を受けておりますが、私の今回の通告書に長期スパンの想定と書かせていただいたのは、この広域連携もあるからということで、認識していただきたいというふうに思うんです。

本市は恐らくこの事業に参加していくだろうと考えますが、そうするとより一層、そうした未普及地域は取り残された感が私は残ると思います。公平性に欠けるという、極端な言い方をすれば、観点にも至ると思いますが、早い時期の取組を願うのですが、そうしたことを踏まえて、

再度検討していただけることについて、見解を伺います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　まず、我が家の実家の水は、井戸水になってます。父が50メートルほどボーリングをしたというふうに言っていたんですけれども、現時点では確かにそれまでの不便はないと聞いています。

ただ、地下水をそのままくみ上げている状態ですので、水質があまりよくないであったりとか、それこそ将来的に水量がどうなるかというのが分からない不安定だったりという問題はあります。ですので、できる限り水道をきちんと整備していく、その方針はしっかりと持ち続けたいと思っています。

一方で広域連携という観点でお話をしますと、まずこれは本市として積極的に取り組む構えでいます。これのいいところは、安芸高田市内に水を供給する、水道事業をやる際に、コストが下げられるというところにあります。お金がちょっと浮くんですね。そうすると、財政に余力が生まれますので、生まれた分だけ私は普及のほうも進めやすくなるんではないかと思ってます。

昨日の答弁でも申し上げましたし、恐らく今日もその話が多くなるのかなと思うんですが、とにもかくにも、この町、財政が困っています。そうした中、少しでも余力をつくっていく。生んでいくという取組が一つはこの広域連携だと思っていますので、広域連携とその普及ですね。これが必ずしも、バッティングするものではないと。仲が悪いものではないと認識しています。

もし補足があればお願いします。

○山 本 議 長　続いて答弁を求めます。

建設部長　平野良生君。

○平野建設部長　安芸高田市の水道の現状でございます。

現在、未普及地域にお住まいの方が約3,000人いらっしゃいます。特に、美土里町と高宮町が多い状況でございます。これらの一つの原因としましては、やっぱり安定した水源の問題があるというふうに認識をしております。

先ほども市長のほうで答弁させていただきましたように、現在水道の広域連携の事業が前に進んでいる状況でございます。それらを検討していく中で、未普及地域の解消に向けても検討を進めてまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　検討をしていただくということで、できるだけ早いほうがいいとは思うんですが、でもその水のことです。それから地域のことです。財政も伴います。簡単にできるとは思ってませんけれども、ぜひとも本当に持続可能なまちづくりを目指されるなら、そこも絶対に検討していただき

ながら、住みよい町にしていただきたいというふうに思います。
よろしくお願いいたします。
次の質問に移ります。
農業振興についてでございます。
昨日も質問がございましたけれども、農業基盤の確立と担い手確保について、事業継承を念頭に置いた取組を掲げておられます。現況での本市の重要課題は、私はこのことも含めて有害鳥獣対策と担い手確保が、最重要課題ではないかというふうに認識をいたしております。
これまでも、行政としても、このことに対する取組は本当に十分、予算編成も含めて十分なされてきたと思っておりますが、大変難しい問題であるということも認識しており、言葉は少し語弊があるかも分かりませんが、費用対効果の面から話をしたら、なかなか成果は上がっていないのではないかというふうに私は認識しております。
こうしたことについて、市長は今後どのような見解で、どのように取り組んでいかれるか、お伺いさせていただきます。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。
市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問がありました農業振興についてお答えします。
シカはいるけれども、人はいない問題ですね。昨日も少しお話ししたんですが、この町において、非常に大きな問題となっています。ただ、この町に限らず、日本全国いろんなところで問題になっている。でも解決していない。ちょっと解決しそうにないなというものではあります。
ただ、もうシカに町を明け渡して、人が避けるのかというわけにはいきませんので、ここはコスパ、費用対効果、確かによくない事業、取組ではあるんですが、引き続き粘り強く進めていきたいと考えています。
この鳥獣対策としては、基本しかありません。今後も「寄せない・入れない・捕まえる」をしっかりと基本を大事に取り組んでいく構えです。
より効果的な策があるんじゃないかという意味では、大学等とも連携して検討していきたいと考えています。
もう一つの人のほうですね。担い手の確保については、昨日も御紹介しましたが、農業できちんと食べていける。その姿を、その絵を示すこと、共有することが大事だと思っています。その意味では、実際、水耕栽培による野菜の生産を行っている方、または大規模に水田の経営をされている方などに、生計がしっかりと成り立っている方が目立ちます。
ですので、こうした好事例をしっかりと研究し、広く展開していく、そういう取組で、なかなか効果が上がりにくい分野ではあるんですけれども、行政としてこれからも取り組んでいきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。
秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　市長から答弁をいただきました。有害鳥獣対策も担い手対策も、本当になかなか難しい問題で、だけれども、しっかり粘り強く検討していく

んだということでございます。私も同感で、すぐには決まりませんけれども、しっかり検討していかなきゃいけない課題ということを認識していただきたいと思います。

まず、有害鳥獣対策についてお伺いしたのは、地域で取り組まれている防護柵について、今までを含めたらかなりの補助金も投入されて、これからもやっぱりその取組はしていかなきゃいけないんだろうと思いますが、そうした経緯の中で、先ほど申しましたように、効果が上がってないというふうに思っております。

とりわけ、今年度、今までもそうでしたけれども、特に田畑を荒らすイノシシの被害、私もいろんなことがあって、地域をときどき回らせてもらう中では、その話がいつも出るんです。水田の例えば土羽をほじくり回して、土羽が壊れて、高宮でも直したところもございます。それには、また予算もかかることですが、そういった被害が拡大しているという現状はあるので、改めて質問してるところでございます。

地域も防護柵設置とバッファゾーンなどの取組と、それから猟友会の方がたゆまない努力をされながら、この取組をされているのは、本当に私は頭が下がる思いです。はたから見るばっかりなんで、駆除していただきたい、いただきたいだけなんで、頭が下がる思いです。やはり頭数的には、捕獲頭数等も含めて、なかなか減少しないと考えられております。この獣害の拡大により、いわゆる農用地保全の意欲低下とそれから昨日も質問がございました耕作放棄地の増加というのは、この有害鳥獣被害もかなり大きな要因となっていると考えております。

昨日の同僚議員の経営基盤の確立という質問と耕作放棄地についての質問があったんですが、これに私はこの有害鳥獣対策も含めて通ずるところがあると思うんです。というのも、農業の経営基盤について、私もいろいろ、経営基盤とはどういうことかなって考えよったんですけれども、昨日の答弁では生産基盤と販売基盤というふうにお答えになりました。そういうことなんだなということの見解の中で、有害鳥獣対策、先ほど申しましたように農地を荒らす、皆さんが作付の意欲減退につながっているということを考えたときには、これは逆に生産基盤の維持につながるということで、ひいては質問させていただいております、経営基盤の確立につながっていくんだろうという観点からお伺いいたしておるところでございます。

実は私もこういう質問をさせていただきながら、これという対策は持ち合わせておりませんし、いろいろ調べてみますが、有害鳥獣対策についての新聞、それからインターネット等でも、なかなかそのこと自体で取組は例がありますけれども、どこを見ても同じ取組でさほど変わったことがなく、効果が上がったというのは報告がないような気がするんですね。本当に提案として私がすることはできないんですが、長期展望に立ったときに、有効施策は何かということを一番大事なのは、市民全員でまず考えていくことが大切だというふうに思うんです。そのための行

政の役目であったり、議員の提案等をしていく必要があると。また、特に国庫補助金の活用や、関係機関との連携を取り、先ほど申されたように粘り強く対策を講じていく。このことが結局対策ではないかなというふうに考えております。

市民の声の中には、先ほど、ちょっと言葉が悪いかも分からんですが、補助金を頂いて、防護柵、ネット、ワイヤーメッシュ等を張っていくのは、補助金でやっていかれるんですが、大事なのはその後の維持、管理、これは行政に言うんではなくて、やっぱり市民全員が認識を持ちながら、修理、改善をしていかないといけないんじゃないかという声も頂いております。

だから、そうしたところを踏まえて、一番今申したいのは、やっぱり市民と一緒になって考えていく。そういう取組をしていただくのに、何かいい施策はないかということをまずは考えていただきたいなと思うんですが、市長の見解を再度伺います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問のあった地域との取組、その進め方なんですけれども、もう町の共通認識にはなっているんじゃないかなと感じています。この町、どこを通ってみても、田んぼと畑はあるわけなんですけれども、どこを見ても、フェンスが目立ちます。どこにでもあります。それこそ、景観を損ねているという問題から、実被害、農作物への影響がある。農家の方への生産意欲の減退につながるというのがありますので、これはもう市の大きな課題として、行政としては当然認識をしていますし、市民の方においてもこれはいけんねと言って、通じやすいテーマだと思ってます。

その上で、どうしていくか。現時点では答えがないというのが残念ながら事実ではあるんですが、これまでやってきた対症療法ですね。シカが出てくる、出てこないように押し返す。シカの数が増えた、減るように狩るというのだけでは、切りがないと、らちが明かないというのが明白になっていますので、やはり根本から直していく、その取組、アイデア、発想、技術というのが待ち遠しい限りです。

当然、シカが増えて、人里に下りてきている理由、いろいろと調査が進んでいるので、明らかとなってきているんですが、その辺りを踏まえれば、すなわち原因があって、背景があって、今結果となっていますので、私は何らかそこでですね、対処できるものもあるのではないかなと思ってます。

ただ、これは、もう既に行政の手が届く範疇を超えてきていますので、先ほど申し上げた大学との連携ですね。要はちゃんと研究していくという取組が必要だと思っていますので、その辺り行政でもう手が届かない分野というのも、全く無策ではいられませんので、手を借りながら、力を結集しながら、向かい合っていきたいと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　有害鳥獣対策について、今後、大学との連携を含めて、教授、先生方の考え方とまた現地とは必ず通ずるところがあるとは思わなくても、違う観点から物事を考えていくということになれば、大変重要なことだというふうに思いますので、ぜひとも進めていただきたいと思います。

それでもう1点は、担い手確保について、私の考えを述べさせていただきたいと思います。

本市の各地域で集落の存続について、高齢化の進行で様々な担い手が減少していく中で、集落の基盤である農地の保全をどのように取り組むべきなのかということが今現況での、私は大きな課題だと思っております。その対策として、農地を誰がどのように維持管理するのか、その地域に見合う方策を集落や地域の存続のための施策を考え、行動に移す必要があるというふうにも思います。そのためにも、その担い手確保は重要な課題と認識しているところでございます。

担い手確保の課題は、大きく上げられるのが、御承知のように、現在の担い手が高齢化していると。それから、次世代の担い手が必要だということだと思います。

昨日の市長の答弁の中で、私も担い手ですというのがございました。私は市長をより一層身近な人に感じるようになったところでございますが、その担い手、本当にこれが重要な課題、これはもうずっと私も過去から質問させてきていただいとりますが、なかなか目に見えて成果も上がらない。人口減少が大きな要因だと思っております。

国のほうも、農林水産省は新規就農者の確保のために、情報提供、人材育成、研修への支援等や経営スタートに当たっての農地の確保、それから機械や施設整備への支援等を用意されて、この施策の活用により、担い手確保という手段も一つの選択肢だと私は思います。

本市においても、新規就農支援であったり、担い手育成事業であったり、さらには人農地プラン等の施策展開を図られているところでございますが、私はもう一度原点に返って、過去において質問もしてきたんですが、それは担い手の人のほうに目を向けて、検討していくことも大切なんではないかと考えます。

その中では、過去にも言ってきたんですが、定年退職者であったり、女性の就農であったり、都会の人で農村、農業に興味のある方、今何か増えてるみたいですね。もちろん、現在コロナ禍で影響を受けている外国人就農者等で対応が考えられると思うんですが、本市の農業振興に大きく影響する課題ですので、再度、今お話をしたことについて、市長の受け止め、今後の取組についてお伺いいたします。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問のありました担い手についてお答えします。

この後継者問題というのは、第一次産業に限りません。いろんな産業

でこの町においては、担い手不足となっています。私が生まれ育ったのは、そこの商店街だったんですけれども、多くのお店で後継者が見つからないということで、もう店を閉じられたというケースが目立っています。

農業で第一次産業に話を戻すと、確かに誰かやってくれる人はおらんかなと思うわけなんですが、いません。なぜか。自分がやりたくないものをほかの人がやりたいわけがないですよね。こんな基本的なことを見失ってはいけないんです。担い手不足、後継者不足。根本は今ある形がよくないから、結果として当然のように担い手が消えた、それだけです。だったらどうするか。今やってるこれが面白くなればいいんです。今ならなくても、これから面白くなるんじゃないかな。そう思える姿にしたらいいんだと思います。

最初の答弁でお答えした水耕栽培であったり、大規模な農家さんですね。稲作の農家さん。これを好事例と呼びましたが、要は成功されてるんです。成功というのは光です。人はそれに吸い寄せられます。この成功事例を少しでも多く見つけて、できるだけたくさんの人に紹介をしていく。これが行政にとって、まず最初に大事な取り組まないといけない事業だと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

秋田雅朝君。

○秋 田 議 員　いろいろと難しい課題、たくさん質問させていただきましたが、本日は石丸市長の所信について、本市の今後における取組について、認識の共有ということで、現況で私が注視している市長の個別方針4項目についてお伺いをさせていただきました。市長が掲げておられる基本方針であったり、個別方針の実現こそが持続可能なまちづくりにつながり、それから新しい安芸高田市の創造につながっていくと私は確信を持っております。

ぜひとも市長の若さと実行力とで、前進をしていただきたいということを申し添えさせていただきまして、私の一般質問を終わります。

○山 本 議 長　以上で、秋田雅朝君の質問を終わります。

この際、11時10分まで休憩といたします。

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

午前１０時５７分　休憩

午前１１時１０分　再開

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

○山 本 議 長　休憩を閉じて会議を再開いたします。

続いて質問の通告がありますので、発言を許します。

5番　山根温子さん。

○山 根 議 員　5番、山根温子でございます。

通告に基づきまして大枠3点について御質問させていただきます。

まずは、政治の世界へようこそ。石丸伸二市長。

市民とともに、これまでを振り返り、これからを考え、世界で一番住みたい町を目指していくとの所信表明。さらに次世代に渡すべきは不安ではなく希望。将来世代に負担を先送りしないスマートな行政を選択するときが来ていると考え、予算の裁量を確保し、未来への投資により町の魅力を向上させ、次世代が希望を持てる社会を目指すと述べられています。まさに、バンカー、銀行家であった市長には、財政健全化について大いに期待するところです。

ただ、計画を基に動くのが行政です。たくさんの計画を整合性と連動性を持って動かしていく。一番は総合計画ですが、近年マニフェストを掲げる市長の公約と、総合計画との調整が本当に計画行政において課題となってきているとも聞こえてきます。計画期間を首長の任期に合わせるという自治体もあるほどです。スマートな行政を行っていく上で、計画との調整をしっかりと取ってください。

昨日の一般質問には、とても分かりやすく答えられ、そして特にまずはお片づけ。それもきちんと整理整頓し、新しいスタートを切る準備をするというお答えからは、未来への投資に向けてスマートな行政で、乗り切っていく自信を感じます。

それでは、質問に入らせていただきます。

まず1点目、行政における人材の育成について。

行政改革をまずは市役所から行うとのこと。事務事業の改善などと同時に、組織の見直し、併せて人材育成基本方針を見直し、人的資本の活用に注力するとともに、働き方改革や人事評価制度の運用を通して、職員の意欲・能力のさらなる向上を図っていくと述べられています。

昨日、御自分の今までの分析の仕事について説明されており、議場と傍聴席の男女の割合について触れられていました。そうです。この議場には女性は2人。安芸高田市の人口の半分以上は女性なのですが。さらに言えば、市長の後ろに並んでいらっしゃる執行部、今はコロナの影響で人数は少ないですけれども、全員が座っても、全員男性です。私も議員年数短いですが、その間に、部長、次長となって、この席に、執行部側に座られた女性は見ておりません。

この聖域と言われる議場で、市の行政が決められていく。ということが、身近なところでいろんなことを示すデータでございます。ちょうどその市長が触れられた女性割合、この話は私が今日人材育成に関して、配付した資料に関わるものですから、使わせていただきましたが、ここで配付資料の説明をいたします。

お手元に、県内近隣市、及び人口類似市の管理職、課長相当職以上に占める女性の割合の経年的変化を広島県の男女共同参画に関する年次報告を基に作成した、折れ線グラフを配付しております。御覧のとおり、安芸高田市を見てください。緑の線です。この6市の中でさえ、最下位に位置しております。

31年に安芸高田市は8.2%です。一番初め、平成21年、この年は安芸

高田市が女性参画推進条例をつくった年でございます。6.8%。そこから上がっていくのかと期待をしておりましたが、現在10年以上経過した数値が8.2%。10年以上たっても10%を超えられないという現実があります。

片や、21年に本市より低かった濃いめの青丸の線ですね。江田島市。4.3%がずっと見ていくと30年には25.5%。トップです。6町の中ではですね。31年に21.6。人材の登用ですから、上がったり下がったりはあるけれども、その後黄色い竹原市、3.1%が16.1%と数値を上げています。さらにはお隣のオレンジ色の三次市も12.9%から22.4%までアップしております。

このグラフが安芸高田市の男女共同参画の状況を伝える一つのデータですが、市長はこれをどのように分析されますでしょうか。さらに、これまで見直されることのなかった、人材育成基本方針については、どのようにお考えか、お伺いをいたします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　改めまして、新人の石丸伸二です。御指導のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

御質問のありました人材育成についてお答えします。

まず、後ろのほうにありました人材育成基本方針なんですけれども、こちら中身見てみますと、大枠としては現在もなお有効であると認識しています。ただ、社会情勢はかなり変わってきていますので、検討すべき課題があるというのも、また事実です。

特に、女性の登用ですね。先ほど資料を頂きましたけれども、数字としては非常に残念な結果になっていると感じます。じゃあ何%ならいいんだろうと考えたときに、私は最近ニュースで聞いた、アメリカの最高裁判所の判事の言葉を思い出します。18日に亡くなられた女性の方なんですけれども、ニュースで御覧になった方もいらっしゃるかと思います。

アメリカの最高裁の判事は全部で9人いるんですね。この9人の1人がその女性だと。その方はずっと自由と平等のために、法律の世界で戦ってきた方なんですが、判事9人のうち、何人女性になったらあなたは満足ですか。その方は、こう答えたそうです。9人です。

おや、と思いますよね。9人全部。それはゆがんでるんじゃないの。と思わせることが彼女の狙いだったんです。彼女はこう続けます。全く逆のことが今まで起きてました。なぜそれを看過したのか。見過ごしたんですか。9人全員男性を当たり前だと思ってた。それはやっぱり改めないといけなかったんですよね。私がやってきたことはそれですと。そういうお話なんですね。

その意味では、私はここにいるメンバーが全員女性になっているというのも、面白いかなと思うんですが、現実的な配分としては、半々あたりを目指していければなと思っています。

そのためには、アファーマティブ・アクションという片仮名の言葉があるんですけれども、格差是正のための措置というものがある程度必要になってくるかと思います。

有名なところでは、アメリカの前の大統領でオバマ大統領。人種でいうと黒人にカテゴライズされる方なんですが、あの方のような黒人の方というのは、いろんなところで不遇だと。差別が見える形、見えない形であります。

なので、日本的に言葉を使えば、ちょっと響きが悪いんですが、げたをはかせるという制度をアファーマティブ・アクションといいます。アファーマティブというのは、是正すると、正しくするという意味なんですけれども。要は、黒人であったり、あるいはこのケースに近づければ、女性が、大学100人いたら、必ず20人は、30人は採りなさいという特別枠を設けるんです。違う言葉では、これクオーター制と呼ばれていたりします。確か、ほかの世界の国の中には、議会等にもこのクオーター制導入していた国が幾つかあったように思うんです。こうした是正制度、もちろん言葉がよくないのであまり使いたくないんですが、げたをはかせるという面は少なからず出てきますので、それはそれでフェアじゃないんじゃないかと。不公平なんじゃないかという批判は必ず出てきます。

ただ、それをもってしても、なお余りあるメリットが、この格差是正、不平等の対象にはあると、私は考えていますので、その取組、進めていきたいという思いでいます。

あとは、その人材育成基本方針の中にも出てくるんですけれども、人材評価、その制度の運用についても、見直すべきところがあるかと思います。より具体化し、実効性を高めていく。今既に導入されているものではあるんですが、なかなかそれが組織運営にうまく反映し切れていないという面が残念ながらありますので、その辺りは今後の課題だと思っています。

いずれにしても、市政の改革には、市役所職員のさらなる成長が必要不可欠となっています。職業人としての誇りをみんなが持って、職務を通じて、自己実現ができるよう、制度の設計を工夫していきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

山根温子さん。

○山 根 議 員　私もこの人材育成基本方針、本当にすばらしい方針だと受け止めてます。平成19年につくられましたが、ただこの最後にも方針自体に今後はその都度見直し、ローリングをして完成度の高いものにしていくことが重要です、と書かれていながら、総合計画も第2次、行政改革大綱も第4次になる中で、これだけが見直しの必要を認められなかったということは、とても残念だと。

以前にもお聞きしましたが、一般質問でも言ったのですが、この基本方針には期限がないからと一蹴されたことがございます。しっかりと計

画等は、計画行政ですから、見直しをかけながら、進めていただきたいと思います。

特に、この基本方針に本当にこれを書かれた方は、すごく市の行政経営を考えられていたんだなと。総合計画は事業戦略だと。行政改革大綱は組織戦略だと、そして人材戦略が人材育成基本方針であって、この3つがしっかりとどれもが欠けても意図する効果は得られない。相互に連携して補完し合いながら、実行力、事業推進力を生み出していくものだと言われております。これをつくったときの気持ちというか、力の込め方、それがしっかりと力を発揮できるように、職員の方々の今後に期待するところでございます。

市長がアメリカの最高裁の裁判官のお話しをされました。この方、2本映画に出てらっしゃって、お名前が残念ですが、記憶力が低下しておるもんで出てこないですが、本当にすばらしい方です。アメリカにしても、国際的な大企業では、経営戦略としてダイバーシティ、マネジメント、多様性への取組を進めて、中でも一番手っ取り早くできるのが女性の活用ですから、その取組が企業の成長や価値を生み出すと言われております。

市長の企業での御経験から、女性活用も進んでいたのではないかと思いますが、いかがでしたか。お聞きいたします。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　今の御質問は、民間企業における女性の活躍という捉え方でよろしいでしょうか。

銀行に勤めていたわけなんですけれども、銀行というのは最近ドラマもやってますので、皆さんイメージがわきやすくなっているかと思うんですが、かなり男社会です。あのドラマが昭和の設定というか、舞台の話、もともとがそうなので、そればっかりになってる面があるんですが、やはり依然としてその色は残っています。

ただ、であるがゆえに、今山根議員が言及してくださったんですが、ダイバーシティ、ダイバースというのが分かれるという意味なんですが、ダイバーシティ、分かれている、多様性ですね。このダイバーシティというものを強く推進しようという取組を行っていました。私が会社に入って最初はなかったんですね。リーマンショック前後だと思うので、この10年ちょっとの取組なんですけれども、その頃ダイバーシティ推進室という部署が立ち上げられたのを覚えています。要は、企業がその頃、日本の企業はどうしても、おくれがちだったんですけれども、世界の流れを見て、世界でやっていく企業であるならば、これはいかんと慌てて、女性活躍を推進しようという、くしくもといいますか、その実は背景としては、国の動きも当然ありましたが、そのつながりで民間企業も金融業界も言ってしまえば、その重い腰を上げたというのが直近10年ぐらいではないかという認識でいます。

ただ、ここの絵がその全てなんですけれども、もっとテンポがゆっくりしてるのが行政なのかなと思います。先ほどグラフを御提示いただいたところではあるんですが、安芸高田市以外のところでも、この町以外でもなかなか数字としては芳しくないという面があろうかと思います。この、ここが象徴している通りなんですけれども、より一層、女性が活躍しやすいように。私この言葉を使うとき、ちょっと言いよどんでしまうといいますか、ためらいを覚えるんです。さっきの話じゃないんですが、人にやれやれというのは、何とも気が引けてしまうといいますか、ちょっと遠慮が必要なのかなとは思っています。ですので、より厳密に、正確に私の思いを表現するならば、女性が自由に思いのとおり活躍できる、そういう環境を我々のほうから整えていきたい、そのように思っていまして、それを当然この市政にも反映していきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

山根温子さん。

○山 根 議 員　市長に企業のことをお聞きしましたのは、大企業は国から言われてもそれに対して引き続いて国の方針に沿って行きやすい。ただ、こういう地方都市になりますと、まずは国や県が言って、その方針に沿って動けるのは自治体なんです。自治体は人事院勧告でその身分も保証され、環境的にもいろんな保証をさせていただいてます。

そんな中で、しっかりと市役所の中にも女性職員おります。その彼女たちがしっかりと自分の力を生かせる環境で、自分の考え、発言ができる。そして地位的にもガラスのシーリングじゃないですけれども、ガラスの天井でもうここまできたら何も言っても届かないというような状況ではない環境をつくっていただきたい。

そうすることで、しっかりと、人口の半分以上は女性ですから、その声も一緒に届いていく可能性が出てくるんではないかと思い、企業の経験も聞かせていただきました。カルビーやライザップの取締役としてダイバーシティへの取組を推し進められてきた松本晃さんの話を聞くことがありました。改革はトップの覚悟からだと。経営戦略として、またダイバーシティマネジメントを進めるＮＰＯ法人の内永ゆか子さんの話も聞きました。キャリアアップを阻害する要因は3つあると。これは前にも申し上げたんですけれども、社内に目指すべきロールモデル、今はもうパーツモデルでもいいから、そういう方がいらっしゃれば、その人を目指して頑張ろうという気になる女性職員が出てくる。また、ワークライフバランス、仕事と家事、育児のバランス、これについては公務員はまだ民間企業に比べたら、本当に環境を整わせていただいていると思います。さらに3つ目、これが一番、私もある意味その存在が一番問題だと思ってるんですけれども、オールドボーイズネットワーク、男性中心社会のネットワークの存在がございます。

こういう3つの阻害する要因を何とか軽くしていくことが今後について安芸高田市の職員、女性職員についてもプラスになるのかなと思いま

す。職員は女性だからというのではなく、能力のある人が男女を問わず、その持てる力をしっかりとこの町のために生かしてほしいと思いますので、今後について頑張っていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、2問目に入らせていただきます。

教育の推進について。

教育の質の追及に向けて、ＩＣＴの利活用を推進し、確かな学力を身につけさせるとともに、思考力、判断力、表現力を含めた総合的な生き方を高めるとのことです。

確かな学力を身につけ、急速に変化する社会にも対応してこられた市長が、御自身の経験も含め、本市においてどのように教育の質を追求していこうと考えられているのかをお伺いいたします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問がありました教育の質に関連してお答えします。

私の経験の話になってしまうんですけれども、常にこの15年間、会社に入ってから経験した15年間、思っていたものというのは、常に世界経済の最前線に自分がいるんだ、そういう覚悟でした。先ほど山根議員が、トップの覚悟が大事だというふうにおっしゃったんですが、覚悟、非常に大事だと私も認識しています。

そしてそれを支えていたのは、私の解釈では自信でした。自分を信じる力ですね。自分ならできるはずだと、そう思えることが常に私を動かしてくれたように思います。

したがって、私の経験に即して言えば、この教育で伝えるべき、教えるべき、生きる力というのは、自信、自分を信じる力と考えています。

では、自分を信じるために何が必要かなんですけれども、これは自分が何者なのか、何者でありたいのか、それによります。それを理解するところから自信というのは生まれてくるはずなんですね。そして、物事を理解するためには知識が必要です。

例えばですが、どうでしょうか、皆さんなじみがあるお酒にしましょうか。日本酒がいいのか、ワインがいいのか、ビールがいいのか。飲んでみて、うん、うまいというのはあるんですが、そこからさらに深く一歩、二歩、三歩進んでいって、そのおいしさを語るには何が必要か。知識なんですね。このブドウの品種は何で、どこどこの国、畑、こういう土で育て、担い手、造り手がこういう人です。そういう知識があった上で味わうと理解がより進むんですね。ですので、知識がとても大事になってきます。そして、この知識を使った理解、自分の理解というのは、他者、他人に対する理解も促してくれます。

お互いの尊重があってこそ、様々な価値観が認められるというふうに考えますので、この理解力が豊かな社会にとっては必須だと考えています。その意味では、学校で教える知識というのは、総じて自分であり、

他者を理解する手がかりとなるように教える必要があると考えています。

こうした生きる力が高められるように、教育の質を追求していくわけなんですけれども、そのために大事なのは教えるほう、教えられるほう、共になんですが、どちらかといえば、こちらサイドです。その自信、理解、知識、その重要性を大人が正しく認識する必要があると考えています。

先ほどから話に出ています、学力向上戦略においては、学校現場の取組はもちろんなんですが、それだけでなく、保護者、さらには先ほども触れましたが、地域による協力というのもうたわれています。やはり市民が一丸となって、子供たち、子供たちの未来を考える、その姿こそ、教育の推進には大事だと思っている次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

山根温子さん。

○山 根 議 員　この質問については、同僚議員も先ほど聞かれております。その中で、最終的には地域の力も加えたところで子供たちを伸ばしていくというところですね。

そういう地域の力を協力を仰ぎながら進めていく、それも2番のふるさと学に関わってくるかと思います。このふるさと学のこれからについてを市長とそして次には教育長にお伺いをするところでございます。お願いいたします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問がありました、ふるさと学についてお答えします。

まずこのふるさと学というものなんですけれども、これは自らの生き方を考え、将来に対する夢、そして生きる自信、これを子供たちに持たせることを狙いとしてあります。

そして、おのれを理解するために大事なのが、先ほど申し上げた知識、まさにこのふるさと学、そういう立ち位置で配置で考えています。ちなみになんですけれども、このふるさと学のこれまでを御紹介しておくと、各学校におきまして、地域の調べ学習というのを通じて考えたことを交流会において発信するなど、活動を行っています。

詳細については後ほど、教育長から答弁をしてもらいます。

この地域という観点でもう少しだけお話をさせていただくと、このふるさと学、ふるさと、いろいろ定義、捉え方はあるんですけれども、私は身近な大人が何を考え、何をしているのか。これを子供たちに知ってもらう、伝える、その観点その表れなんだと思っています。

私は今38才になるんですが、この38年を通して、確かな学力が身につけられたのか、いまだに確信は持てないところではあるんですが、それでも何か自分の支えになった、特に学校、勉強するという段でこれがよかったのかなと一つ思いつくものは、地域との関わりでした。かなり広義です。

例えば、私が生まれ育った、そこの商店街。物心ついたときには隣、電気屋さんだったんですけれども、電気屋さんの手伝いをしょったと。お手伝いをやる場面がやっぱりありました。それこそ、配達に一緒についていったり、電気屋さんなんで工具がありますよね。工具箱をちょっと片づけたり、お手伝いです。でも、大人に混じって、何かをするという経験は、すごく当時の私にとっては貴重だったように思います。何より、楽しかった。土日は、何回も出して恐縮ですが、親が今います。高宮町ですね。もともと祖父母の家だったんですが、そこに戻って田んぼ仕事をしていました。田植から稲刈りまでですね。小学校を卒業する頃には一通り機械も運転できるようになっていたように覚えています。

やはり、その中でも、地域というんでしょうか。この田園風景ですね。その中に自分が生まれて、そこで育っているんだという実感は、確かにありました。その意味では、このふるさと学ですね。地域を知る、もっと言うと、すぐ近くにいる大人を知ってもらうための大事な手がかりだと思っていますので、これからもしっかりこのふるさと学を生かして、教育の推進に取り組んでいきたいと考えています。

○山 本 議 長　続いて答弁を求めます。

教育長　永井初男君。

○永 井 教 育 長　山根議員の安芸高田ふるさと学のこれからについての御質問にお答えをいたします。

全て、先ほど市長から答弁をしていただいたような気がしておりますが、私が教育長を拝命しまして、スタートさせたこの安芸高田ふるさと学は、今市長が答弁されたことと、軌を一にするものでありまして、本当に力強く私も先ほどの答弁を聞かせていただきました。

この安芸高田市は、生意気なことは申すことはできませんが、ある意味、日本の縮図だというふうに私は捉えてます。

要するに、今、日本社会が抱えている、いい面も悪い面も例えば先ほどから議論になっております、日本社会における農業問題もこの安芸高田市にも存在します。また、先ほど議員が御指摘されました女性の社会問題、これも日本社会の大きな問題ですが、先ほどからありました、この安芸高田市においても大きな問題です。

ふるさと学というのは、この安芸高田市を守り育ててこられた、いわゆる私たちの先祖の生き様や、生き方、そして今厳しい状況の中で、この安芸高田市を何とか守っていこうとされておる大人の人たち。この大人の人たちに出会うということを考えたとき、教室でやる、いわゆる座学、国語や算数の授業だけでは、なかなか大人の人たちに出会うということはできません。したがって、そういう教室でやる座学と地域に出ていって、地域のふるさと学、地域を学ぶ学習を通して、最終的には大人の人たちに出会う。そのことが先ほど市長からもありました、自己を認識する、自分を知ることになり、社会を知ることになり、より確かな自分の生き方、自分はどんな夢を本当は持ってるのか。自分はどんな生き

方がしたいのかということをバランスよく子供たちが身につけていってくれる、それが今目指しておる安芸高田ふるさと学ということになろうかと思います。

そういう意味で、石丸市長が考えておられる、ふるさと学というのは、まさしく今教育委員会が進めております、ふるさと学と軌を一にするものだというふうに確信をしておりますので、さらに市民の皆様方の力をお借りして、さらには今年度から全市展開をしますコミュニティスクール、学校運営協議会あたりの協力もいただきながら、バランスの取れた子供たちを育てていきたいというふうに、考えておるところでございます。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

山根温子さん。

○山 根 議 員　バランスの取れた人間育成ということで、私も自分の子供の頃からのことを考えますと、いろんな大人の方々に接していただいて、育てられたと思います。その中で、ふるさと学、発表会があったときのことを思い出してみますと、小学校、中学校、その生徒さんたちが力を合わせて本当につくり上げた、その中にはやはり地域の方々の関わりがあり、そしてやり切ったという達成感を味わい、また改めて自分たちのふるさとを見直したことと思います。

私もそういう経験というか、体験、大事だと思っております。以前のことですが、酪農をやっていたときのフィールドを使って、酪農協育ファームという活動を行っておりました。子供たちが体験から多くのものを得ることに気づきました。いばらに引っかかった子は、次にくる子のために、そのいばらをよけたり、そしてそういう友達への気遣いを見せる子もいたり。牛が尻尾を上げたときにどうなるか。これを何回かの現象がある中で、予測することができるようになって、危ないよというような言葉も友達にかけるようになりました。これはしっぽを上げると、大体排せつするので、おしっこがかかったり、うんちがかかったりということがあるよということは、何回かの経験の中で学ぶということですね。

こういう現象から予測することができる、そういう気づきをいろんなところで、持ってくれるのではないかと思います。この頃に、私が大事にしてる言葉は、「聞いたことは忘れる。見たことは覚える。体験したことは理解する。」という言葉です。この場でも何回か申し上げたと思いますが。

ふるさとから多くのものを頂いて、心身ともに健康に成長していってほしいと願っています。

次にまいります。

3点目、まちづくりについて。

市長がこれからつくる新しい安芸高田市では、法令遵守の徹底を図り、市民の信頼回復に努める。事実に基づく客観的な視点と、科学的判断の

下、あらゆる施策の費用対効果について再検証し、持続可能なまちづくりを推進していく。町の魅力とは、住む人の生活を守ることにほかならず、市民の皆様とともに、これまでを振り返り、これからを考え、世界で一番住みたいまちを目指していきます。と述べられております。

安芸高田市のこれまでを振り返る中で、まちづくりに大きな役割を果たしてきたのは、地域振興会だと私は受け止めております。地域振興会の役割と位置づけについて、市長はどのようにお考えかお伺いをいたします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問がありました地域振興会について、お答えします。

まずこの地域振興会なんですけれども、簡単に御説明をさせていただきますと、平成16年の合併を機に、それまでは一部の町で取り組んでいた住民自治の取組を市内全域に広げ、そこから始まったというのがこの地域振興会というものです。

この地域のことについて、自ら率先して考え、そして行動していくという活動は、今後も続けていかないといけないと思っています。それこそ、先ほどの答弁で申し上げた通りなんですが、地域で何かをすると、子供を育てると、例えば。その発想がこの町にはとても大事な、必要な要素となってきますので、この地域という単位での活動、これからも続けていきたいと思っています。

もっとも社会情勢は変わってきています。少子化、高齢化。そうした中で、住民のニーズは当然変わります。であるならば、すなわちその地域の課題も変わってきていると捉えています。したがいまして、それぞれの地域、そこにおいてこのニーズが、課題が何なのかというのをしっかり把握しながら、それぞれの地域での振興会の役割、それからそれに対する行政の支援の在り方、こちらについても検討をしていきたいと思っている次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

山根温子さん。

○山 根 議 員　地域振興会、地域単位の活動については今後も続けていくというようなことでした。

なかなか地域振興会自体についての御認識、まだ情報等も少ないかと思いますけれども。実際に地域振興組織自体が今私がこの通告書にもうちょっと書き添えればよかったですけれども、条例、また要綱等でも位置づけされてない。それだけれども、その地域振興会から出られた方が関わるまちづくり委員会は、設置条例がある。そういうところで、でも地域振興会にはいろんな仕事が下りていっております。そういうお金も一緒に下りていく。

そういう中で例えば生活支援員制度等ですね。そういうものについて、もっと具体的な御認識、市長が持たれているんであれば。さらには、今

後について、そういうお金も一緒に、お仕事も一緒に下ろしていく、地域振興会について、今後どのように考えられているのか、お伺いしたいと思いますが、よろしいですか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　まだ見習中ではあるんですが、この1か月ちょっとで非常にたくさんのレクチャーをいただきまして、だんだんと知識を蓄え、理解しているさなかではあります。

その中では、この地域振興会に関して、いい話、悪い話、たくさん伺っています。どちらかというと、圧倒的に悪い話のほうが多いという感想なんですけれども。今お話にありました、まちづくり委員会、これと地域振興会の立ち位置の難しさ。何回か、今日言葉が出てますけれども、バランスがよろしくないという面があるように伺ってます。

ほかの例で言うのが、またちょっとあれなんですけれども、全国的な話として、ＰＴＡの学校の話ですね。問題、これに通じるところがあるように思ってます。誰かがやったらいいんじゃないの、とみんな思うんですが、私はやりたくないな、できれば。

これに陥ってしまうと、もうその組織、その体制というのは、どんどん機能しなくなっていきます。やったらやった分、損な役回りみたいになっていくんですね。負担が大き過ぎるんです。であるならば、先の答弁でお伝えしたところなんですけれども、現状に合わせて見直していく必要があると考えています。地域のニーズ、これが何なのか、それをまずはしっかりと地域で確認をしていく。何もないところから生み出すというのは非常に困難なものだと認識していますので、きっかけは必要だと思うんですが、とにもかくにも最初のステージとしては地域でニーズを再確認する。ここになるかと思います。現状に対して、その地域振興会であったり、委員会、それに対する行政の関わり方。最終的にはここなんですけれども。

行政が今お話にあったとおり、お金をぽんと渡してあります。この渡し方でいいんですか、という辺りもぜひこれから先見直していきたいと思っていますので、その辺りの議論、活発に行っていただければと思う次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

山根温子さん。

○山 根 議 員　市長、今のお話はかなりショックな受け止めをさせていただきました。悪い話がかなり入ってるということで。もっと過去のところから見ていただいて、振興会がどれほど、地域のために頑張ってこられたか、そういうところも受け止めていただきたいと思います。

私も平成8年に帰ったんですが、本当に振興会を動かされてる方、一人にすごく過重な負担がかかっているのは感じております。でも、頑張ってこられた方がいっぱいいらっしゃる。それをしっかりと情報を通し

てだけではなく、その方々とお会いして話を聞きながら、会議は30分から1時間ですが、1時間、2時間、長い年月の地域を守ってきた方々の話、一度聞いてみていただけたらと思います。もう聞かれてるかと思いますが、今の現状の悪さは人口減少、その方々がもう本当に高齢になられた。今本当の地域も曲がり角です。今の団塊の世代、70をみんな過ぎました。今彼ら団塊の世代が、私もすぐ入りますが、70から80になるまでに何らかの形をもってこの地域を支える、その次の世代に譲り渡せるところまでしなければならない。それが今の市長に関わってる大きな責務だと思います。

そんなことを思いながら、市長がスマート行政を行う。これを市民と情報そして認識を共有し、理解し、納得されなければ、このスピード行政、スピード感を持って行うことはできないということを御自分で認識していただきたい。市民と情報、そして認識を共有するということがどういうことなのか。想像されてるとは思いますが、今市長が向いてるのは、自分と同じ世代、そして若い世代、そことのつながりをしっかりとるということが、昨日の一般質問から、そして市長が話される中から伝わってきます。そこに、もう一つこれまで町をつくり上げてこられた方々。さらには今からも子供たちのためにつなげようとされる方々。そういう方々の心とか考えをしっかりと受け止めて、そしてつないでいただきたい。

若い方々へのこれからの責任、本当に過重なのは分かります。財政的にも厳しい中で受け取っていただいた市長には、子供たちの未来、自分たち世代が抱える負担を少しでも軽くしたいという思いがあるのは分かります。そこに向けて今協力してくださるのは、団塊の世代、そしてそれ以上に高齢になられた方々。その方々の知恵と、そして知識と、そして人間関係のつながりです。

そういうところを協力をいただいて進めなければ、この安芸高田市の市長が求めるスマート行政のスピードアップ化は、私は厳しいんではないかと。これは、失礼ながら、忠告となりますけれども。市長も自分の考えをストレートに話をしてくださってます。私もそういう意味では、私が市長に話を聞きながら思っている思いを今ぶつけているところではありますが、これからの市長が進めようとしている行政改革を市民とともに進めていく中で、改めて私の話を聞いてどのように思われたかお伺いをいたします。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　改めて認識の共有というのが、極めて難しいことを痛感しました。なぜか。山根議員は大きく誤解をされています。これは私の責任です。勘違いをさせてしまいました。

まず一つ。私は地域振興会が悪いとは一言も申し上げていません。地域振興会に関わる、いい話と悪い話がある。悪い話が多い。この事実を

述べました。当たり前です。悪い話が多くなければ課題がないんですよね。うまくいってるんなら、ここで話題になるわけがないんです。課題があるから、ここで議員はその質問をされた。その事実を私はここで改めて、私の言葉で申し上げたんですが、いかんせん私の説明不足であったように思います。

そして、若者のほうを向いているという御指摘、こちらもありました。所信表明であり、昨日の答弁も、若者という、若年層というキーワードは何回も使いましたが、その根底にある考え方というのは、年齢ではありません。市民一人一人における時間軸です。今、現在を我々は生きているわけなんですが、どう生きていくか。過去を振り返ることは大事ですが、後ろばっかり見ていると前には進めません。当然スピードも上がりません。ゆえに、未来志向でいきましょう。これは全世代に対する私の訴え、お願いです。そちらの点においても、私の不徳の致すところで、説明が十分でなかったんだろうと、今改めて認識をしましたので、この伝えていく難しさ、理解してもらうことの困難、しっかりと肝に銘じてこれから先、市政に取り組んでいきたいと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

山根温子さん。

○山 根 議 員　私の理解力のなさがしたことかもしれませんけれども、今後についてこのようなことはさらに何回もあるかと思います。そこを一つ一つクリアしながら進めていかなければ、この安芸高田市のトップとして引っ張っていく困難があると思いますので、そこのところは覚悟を持って当たっていただきたいと思います。

以上で、私の一般質問を終わります。

○山 本 議 長　以上で、山根温子さんの質問を終わります。

この際、13時まで休憩といたします。

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

午後　０時０７分　休憩

午後　１時００分　再開

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

○山 本 議 長　休憩を閉じて会議を再開いたします。

続いて通告がありますので、発言を許します。

7番　石飛慶久君。

○石 飛 議 員　7番、無所属、石飛慶久です。

まずは新市長、石丸新市長誕生おめでとうございます。また、ふるさと安芸高田市へお帰りなさい。

では、通告の2項目について、質問させていただきます。

まず第一に、総合計画について。

自治体が策定する計画全ての基本となる最上位計画である第二次安芸高田市総合計画、後期の構想・計画を見直すお考えのようですが、現在の実施計画の推進は停滞するのでしょうか。

○山 本 議 長　　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　　戻ってまいりました。改めましてよろしくお願いいたします。

基本計画の見直しについてお答えいたします。

この基本計画なんですけれども、平成27年に始まりまして、最初の5年間が終わったと。そして後の5年間が始まりますので、現在その後ろのほうを策定している段階です。というのは、この基本計画の見直し、5年という区切りは、当初に定められた方針に基づくものでありまして、社会情勢、それから計画の進捗等を、これをうまく計画に反映させるために見直すというのがこのタイミングになっています。

その意味では、計画の停滞を心配する話ではないと。むしろ、改めて計画を最適化して、強く、早く推進していく機会、好機というのが正しい認識になろうかと思いますので、ぜひ市民の皆様には御安心をいただきたいと思っています。

○山 本 議 長　　以上で答弁を終わります。

石飛慶久君。

○石 飛 議 員　　安心しました。基本計画が5年に1回見直し、そして実施計画が毎年ローリングして見直しをして、翌年度へやっていくという形です。

今までも市職員一体の計画の見直しをして、行政サービスが低下しないように、いつも日頃から努力して、積み上げてきた先人たちのおかげがあると思います。

新市長が新しい安芸高田、今までの政治を続けていいのか。刷新だという強いスローガンを上げられて、新市長誕生という形に、その中にはひょっとして呉市のように総合計画の見直しの素案が提出されようとしたときに、見直しをかけられて今止まっております。そういう形も本市もあるのかなと、ちょっと心配しました。

今度は新市長が世界で一番住みたいまちを目指すという、これを具現化するためには、今の総合計画、プラスアルファの行政改革を今、またちょっとコロナの関係で止まっております。その辺をどのようにうまく組み合わせていくか。新市長のこの所信で基本方針が2項目、個別方針が7項目。これと総合計画。行政改革。これをどのように組み合わせていくか。そこが具現化するためには必要な政策方針を構築するために必要なところだと思います。その辺はどのようにお考えでしょうか。

○山 本 議 長　　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　　総合計画の扱いについてお答えします。

呉市の例に言及する立場にないので、そちらに関しては差し控えたいと思うんですが、概してこの計画というものは、適宜見直す必要があると考えています。一般論です。

実は午前中に山根議員のお話の中で、ちょっとそのワードも出たので、どこかで触れたいなと思っていたところなんです。時間軸ですね。期間

の区切り方というのは、特に今、時代に合わせる必要が生じていると感じています。

先ほど、後ろのほうが5年間、また5年間だと申し上げたんですが。この5年という区切りが物すごく長く感じています。例えば、企業で民間企業。新聞の欄でときどき文字が出るので、御覧になった方もいらっしゃるかもしれないんですが、中期経営計画という言葉が、一頃すごくはやりました。今も採用している企業はとても多いんです。中期、大体3年から5年です。それぐらいの期間で、会社を経営をどうしようかという計画を立てて、それに合わせて年度ごとに経営していく。そういう発想なんです。

この中期経営計画、中経をやめようという動きが今広がってきています。なぜか。3年、5年ごとに見直すのでは、間に合わないからなんですね。そうすると、物すごく刻めば、毎年度ぐらいに落ち着いてきます。毎年度の計画であれば、先ほど石飛議員が言及された、このローリング、回していくサイクル。ふだんのペースがそれになりますので、中期経営計画というのはなくていいんじゃないのというのが民間の最近の流れではあります。

そうしたときに、この市における総合計画。土台が10年、それを半分こして、5年ごとに見直すという計画もあるんですが、ちょっとこの期間あたりについては、再考が必要だと捉えています。

特に、私が違和感といいますか。難があるなと感じるのは、市長であったり、議員の任期と合致してないんですね。特には市長のほうなんですけれども。任期が基本的には4年。計画が5年ごととなってきますと、どうしてもずれていきますし、ずれが大きくなります。下手をすると、という表現もあれなんですが、期によっては、ほぼタッチしない、要は何も触れないまま、ずっと1期務める場合もあれば、逆にちょっとだけ触って、すぐ期を終えてしまうケースも出てきかねません。そういう意味では、この期間のところ、その市政、行政と政治という、この組み合わせでもあり、かつ時代の潮流という観点でも、見直しは必要ではないかと思っているところです。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

石飛慶久君。

○石 飛 議 員　何となくですが、市長の言われたいことが分かるような。まだまだ奥深いので全てが理解ができたとは思いませんが、市長の任期、議員の任期、そして計画の5年間というスパン。ずれがあるという。よく分かります。ただ、市長の熱い思いで安芸高田市に役に立ちたい。そして世界一住みたいまちづくりを目指す、その根底があれば、本当に実行力をもって、短期間にスマートな施策展開をしていきたいという思いだろうと思います。

であれば、市長の任期の4年間の中ででき得るスピードアップをして、具現化するための方法を多分模索されてるんだろうと思います。人材と

いいますか、友人関係もかなり広くいらっしゃって、優秀な頭脳、ブレーンとなり得る方々のお付き合いもあると思います。

そういった形で今ある事業、行政サービスの事業、内部で監査するだけか、執行部だけで監査するだけか。それとも外部登用によって、外部監査を受けられるか。そして、施政方針、今度は所信表明じゃなくて、施策方針、どのような形をして、複雑怪奇であればもっと簡素化し、市民に分かりやすい形でやっていかれる方法があると思います。

なので、時間軸でいえば、市長の力で、あとは手法だと思います。今言ったような手法もあると思います。そういったお考えは現在お持ちなのか。お持ちでなくても、当然この定例会が済んだら、すぐに年末になります。来年度の予算編成のためのヒアリングもしなくちゃいけない。当然、施策方針も取りまとめていかなきゃいけない。もう時間的には1か月、2か月のスパンしかありません。

というところで、市長のお考えを再度お聞きしたいと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　今の御質問、私が理解する限りでお答えをさせていただきますが、一つ出てきた外部の力を活用するという観点、これはもうこの町にとっては必須だと捉えています。市全体として総力戦でいろんな課題に臨まないといけないのは、もちろんなんですけれども、それだけではやはり足りなくなっている。この現実を受け入れたときに、自然と出てくる答えは、外部の力を借りる。

もう一つお言葉にあった、そのスピード感ですね。施政方針、次の話ではありますけれども、これを打ち出していく際、そしてその後、政策を具体化して進めていくという段になったとき、もちろんスピードが問われます。ただ、問題はどうやってスピードを出していくかというところかと思います。もちろん、慣れた人間が慣れたようにやれば、早いのは早いんですが、ちょっと長い目で見たとき、必ずしもそれは最適解に、正解にはならないことがあります。要は、慣れ親しんだ環境で、慣れたやり方を続けてしまうと、同じような作業にしかならなかったりするんですね。

ではなくて、その一つ前で申し上げた話もつながるんですが、外部の力を使う。何のために使うか。これまでとちょっと違うことを始めるために外部の力を借りるんですね。であるならば、スピードはもちろん重視しないといけないんですけれども、一方でそのやり方ですね。まさに御指摘いただきました、このやり方、そのものも、ちょっと時間がかかる。手間もかかるかもしれないんですが、これから何回も行われていく、例えばこの議会があります。委員会もあります。そうした中、何が最適なんだろうというのは、常に考え、そして選択し、最適解を見つけるために、絶えず変わっていくことが肝要だと考えています。

御質問が多岐にわたっていましたので、部分的な回答になってしまう

んですけれども、このように考えている次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

石飛慶久君。

○石 飛 議 員　安芸高田市、この小さな自治体、約540キロ平米の大きな面積の中、2万7,000の人口で暮らしております。本当に合併して以来、各町の課題もある程度は解決された部分もあるかも分かりませんが、まだまだ未解決の部分もたくさんあります。

その中で、長、長は石丸新市長、執行部、優秀なたくさんのブレーン、いらっしゃいます。そして二元代表制の下、議会があります。この両輪がうまくかみ合って、市政運営をしていかなくちゃいけない。これは先代の市長からそれは引き継いでるということですね。

ただ、新市長の若さと行動力、そして期待度というものが市民はすごく期待してます。なので、そういう意味でも議会もバックアップもしなくちゃいけない。行政もひょっとしたら組織体制の見直しもしてでも、分かりやすい体制づくり。市長が進めようとする施策を進めるための構築も必要かと思います。そういった意味では、しっかりと私も応援させていただきたいと思います。

ということで、私の思いを述べてこの質問は終わりにさせていただきます。

では、次の質問に入りたいと思います。

2項目目の吉田地区についてです。人口密度の高い拠点のある吉田地区についてです。

この総合計画は、第一次総合計画のタウンセンター構想を踏襲しています。その中の一つの拠点である吉田地区について伺います。

1点目は、昨年度、実施計画を立てる前の計画策定された5丁目地区の市道拡幅・排水溝の蓋がけは、今後どのように地元に説明されるのか、伺います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問をいただきました吉田町5丁目地区の市道と排水溝についてお答えします。

本件について少し御説明をしておくと、5丁目地区の市道貴船線、市道高樋貴船線、市道貴船縦線の3路線で拡幅に関する地元要望を受けている路線となっています。

このうち、まずは市道の貴船線、国道54号脇地石油店から三田葬祭前までの区間を道路の幅員を確保する計画として、昨年度から測量が始まっています。

今後につきましてなんですけれども、計画区間内の優先的に整備する箇所について地権者、それから関係者との協議を年度内に進めていく予定となっています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

石飛慶久君。

○石 飛 議 員　年度内に地元に説明されるということで、地元のほうとしては早くやっていただきたいという声もあると思います。それと逆に言えば蓋がけをするということで、水がオーバーフローする可能性がある。今までの景観というか、例えばうちの息子ではないんですが、3丁目の裏のほうの蓋がけをされてザリガニがとれなくなったと。子供たちにとってはザリガニを捕る遊び場。それがなくなるという声もあるかも分かりません。

もっと言えば、中世の時代は、お城の周りには堀がありました。水路があるんですね。やっぱり当時の長というものは、水を制する。当時もやっぱり大雨のときもあったでしょうし、土地が荒れるということは、大変なことですから、治水をしっかりと堀をやったり、ただ単に防衛のためだけの堀ではなくて、そういった川の流れを整備したと。現在の郵便局の辺りも、昔の古図では港という地名が出てます。

となると、この5丁目のエリア、水路、排水、現在では周りは田んぼもなく、流水地もなく、ほとんどコンクリート、アスファルト、土地に水が吸い込むような土地が少なくなってるというのが現状ですね。そういう意味では、そういった声も一部あるよというところで、本来であれば、全体的にこの地区を見て計画を立ててやっていく形のほうが費用対効果という意味では、時間がかかってもやる必要もあるかも分かりません。

新市長にこの5丁目の地区のこと、なられて多分お聞きになった事業だと思います。交通安全プログラムの中の一つ、これは子供たちが通学路で使うという、危険度が高いので蓋がけをしようというところもあります。

そういった意味で、執行部のほうで答弁書を作られて、今年度は説明すると言って、答弁をぱっと言われた。その答弁だけで終わってるとは思うんですが。新市長にそこの思いを言えと言っても難しいと思うんですが。安芸高田市に帰られて、もっと市民の声をたくさんに聞く時間が必要なのかも分からないと。先ほどの同僚議員の説明でも、共通認識のずれがあって、涙を流された場面もありましたが、やっぱし地元との共通認識というか、そういう幅広い声をお聞きしていただければと思います。その辺はいかがでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　また御質問が多岐にわたりましたので、少し答えに窮するところではあるんですが。

順番に行きますと、まず都市開発、その計画に関してなんですが、これはもうひたすら市になった以上、市として全体最適を考えていく。これに尽きます。昔の地理のお話をせっかくしてくださいましたので、私が最近知った、へーと思った公園なんですが、そこに吉田の人じゃないと御存じないかもしれないんですが、へらほり公園という公園がありま

す。行くと、説明書きがありまして、かつて1600年代だったかな。へらで池を掘ったという公共事業だったという説明なんですね。私も小っちゃい頃からあそこでよく遊んでたんですけれども、その話は全く知らず、大人になって改めて通ってみると、公園になってたので興味を持って見たところなんです。

かつて、池だったらしい場所が、私がここに住んでいたとき、小っちゃい頃は、それが見えない状況になってたと。でも今また周りが駐車場、更地になったりしたのもあり、広い公園になっています。

何が言いたいかというと、町の形というのは、時代とともに変わります。変わるべきだと思っています。全体最適というのは、こうあらなきゃいけない。こうあるべきだ。こうあってほしいな。その理想は当然つくっていかないと、組み立てていかないといけないんですが、正解は一つじゃないと。それは常に念頭に置いていきたいと思っています。

でなければ、極論をすれば、ザリガニ掘りにしようとか、いう話も可能は可能です。もう側溝ですね、溝を蓋をかける云々でなく、ザリガニで埋めてしまえというのも一つの見方としては可能ですが、それは当然全体最適にはなり得ません。というのが一つ目。

二つ目なんですけれども、恐らく私の理解では、市民との意見交換、そのお話だったかと思うんですけれども、これは昨日の答弁でもお伝えしたとおり、あらゆる方法で工夫をしていきたいと考えています。もちろん、議会におかれましては、懇談会というのをずっと行ってきていらっしゃいまして、そこでの意見集約があるというのも承知しています。その上で、行政が、市のほうが、市役所が、どういうふうに市民の皆さんと認識を一にしていくか、共有していくか、というのは、なかなかこれまでができていなかった状態ですので、これから課題はいろいろとあるんですけれども、まずは昨日御案内した、ぎゅっと対象を絞って、カジュアルな自由闊達な雰囲気ができる意見交換の場、これをつくるところから市民の政治参加ですね。意見交換といいましても、相手がそっぽを向いている状態では、なかなか意思の疎通が困難です。ですので、まずは市民の皆様にもこっちをしっかりと向いてもらう、そこから始めていきたいと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

石飛慶久君。

○石 飛 議 員　ありがとうございます。なかなか今までの市長だったら、こういった地元説明の中に、市長が出向くということはなかったと思います。できれば時間が取れれば、そういった説明会にも顔を出していただいて、実態をしっかり見ていただければと思います。

では、次の質問に入りたいと思います。

今年度、新町1号線と国道54号線の交差点に、新たに歩道や右折レーンを設置する交差点改良のための調査設計を行われています。実施計画に移行する時期をお伺いします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問をいただきました道の話、すぐそこなんですけれども、についてお答えします。

こちらについては、簡潔に執行部が用意してくれた答弁をお伝えします。

この調査設計なんですが、今年度、令和2年度に終える予定です。そしてその先が来年度ですね。令和3年度に、国交省や県と協議をし、そして地元調整も進めていく。そして令和4年度、ここで工事に着手するという計画を見込んでいます。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

石飛慶久君。

○石 飛 議 員　令和4年に着手ということで、市長も国・県としっかり連携して進めていきたいという意気込みだと思います。ぜひともここは事故のあった場所です。令和4年という目標値が決まったら、ずれることのないように、実行していただきたいと思います。

では、次の3番の質問に入りたいと思います。

吉田地区には、生活環境の安全性において多くの要望が提出され、いまだに着手できていない課題がたくさんあります。例えば、長年の課題である豪雨時の川向地区の内水排除、今後どのように問題解決されるかお伺いいたします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問がありました川向地区の内水の排除についてお答えします。

この内水排除に関わる問題としては、川向地区だけでなく、本市、この中央が特に大変重要な問題であると認識しています。

現在、川向地区の排水樋門については、多治比川を管理する広島県が設置したというものではあるんですが、樋門の管理、及び操作については地元の皆様にお願いしているという状況です。

川向地区の内水被害の原因ともなり得る、この江の川からのバックウオーター、これを抑制するために、土師ダムの管理所では、洪水時に放流の調整を行ってもらっています。それにより、そこに連結する多治比川の水位を下げることができるということで、また合流地点の樹木の伐採、それから本線のしゅんせつ、これを行うことによって、内水の被害を万一あったとしても低減できるように取り組んでいる次第です。

もちろんですけれども、これから先、国や県と連携を深めながら、この問題に、課題解決に向けて取り組んでいきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

石飛慶久君。

○石 飛 議 員　しっかりと市長も受け止めていただいて、問題解決を図っていきたいという答弁だったと思います。

前日の同僚議員の質問の中でも、河川改修という言葉が市長から答弁が出ました。本来であれば、稲田橋から下流に向けてがどちらかというと川幅が狭くなってます。稲田橋より上流のほうが川幅が広いんですよね。そういった地形の川であるということを再度認識していただいて、本市においては、本村川のほうが優先順位が高い川になってると思いますが、県においてはね。多治比川も人口密度の高い合流点があります。本当に岡山の真備町みたいな危険性を秘めた地形、そっくりな地形だと思います。そういう意味では、県、国、本当にしっかりと連携を取っていただいて、話を長期的に解決するものと、短期的に解決するものと、両建てで進行していただきたいと思います。

そういうことで、再度答弁いただければと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　この川向という場所は、勝手知ったるというと、ちょっとおこがましいんですが、それこそ多治比川はかつて泳いで怒られた覚えもあるぐらい、よくよく知っている場所です。今石飛議員が御指摘いただいたとおり、川幅が、いかんせんあの川は危なっかしい。というのは、それこそ昔から水位が上がったっていうのを見てましたんで、うちの裏でしたので、よくよく覚えているところです。

まさにこの課題に対して、どう取り組んでいくかなんですけれども、この度々出てきますが、時間軸ですね。短期的な、言ったらあれですけれども、取りあえずできることからやっておく。それこそ堆積している土砂の撤去であったり、その辺りで何とかリスクを抑えながら、ただ、抜本的にはやはり河川の改修ですね。この辺りが必要になってくるというのは、もう自明です。

特に、この市においては、この吉田町の本当に真ん中を流れています多治比川、これに万一のことがあってしまえば、当然この市役所をはじめ、役所の中央機能、そこに影響も出かねないというリスクがありますので、これについては当座の対応と長い目で見たときの抜本的な対応、併せて丁寧に進めていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

石飛慶久君。

○石 飛 議 員　本当に危険なところがたくさんあります。そういった防災、危険な場所を早急に解決していただきたい。そして、本当に新市長が思う世界で一番住みたいまちづくりを目標に、邁進していただきたいと思います。

このたび、吉田地区についてということで、特に地元という認識の下、どうにかなりたい。新市長が安芸高田市をどうにかしたいという気持ち。私は地方議員としてそういった気持ち。ここの議場にいる議員、それぞれが市民の負託を得て、多くの声を聞きながら、どうにか安芸高田市がよくならないかという思いで議場に立って質問させていただいております。また、本日の傍聴者、石丸新市長のファンがたくさんいます。そし

て、新市長に期待する、本当に負託をされた、新市長に期待をされた、大きな期待度もあります。新市長、今からも任期中4年間、しっかりと働いていただきますよう、祈念しまして、私の質問を終わりにさせていただきます。

ありがとうございました。

○山 本 議 長　以上で、石飛慶久君の質問を終わります。

続いて通告がありますので、発言を許します。

15番　塚本近君。

○塚 本 議 員　15番、塚本近でございます。どうぞよろしくお願いをいたします。

通告をいたしております2点、本市の将来像と選挙の投票率の向上についての2件についてお伺いをいたします。

まず最初に、本市の将来像であります。

昨日の同僚議員の質問で、随分答弁は聞いております。市長自ら、簡潔に、分かりやすく、述べておられますけれども、私も質問をしておりますので、あえて質問をさせていただきたいというふうに思います。

市長は地元がどんどんさみしくなってきた。危機感と将来に対する不安を強く感じ、世界で一番住みたいまちを目指しておられますが、世界で一番住みたいまちとはどのような町を、イメージされているのか、まずそこのところからお伺いをしてみたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問をいただきました、世界で一番住みたいまちについて、お答えします。

この住みたいまちの定義なんですけれども、人によって異なります。随分異なります。なぜか。それは人が町に求める要素が異なるからです。

例えば、安全な生活だったり、十分な仕事だったり、豊かな自然、あとは便利な病院とか、いろいろこれがあったらいいなと思う要素はあるはずです。それが、一旦提供されると、されている場合においても、それぞれに対する評価、価値というのがまた人によって異なります。

例えば、最近腰が痛いなという方にとっては、接骨院がとても価値のあるものになるはずなんですが、私はおかげさまで今のところ元気にやらせてもらってますので、これまで接骨院にかかったことがないんですね。そうすると、私にとっては、あったらいいのかなぐらいなんですけれども、人によっては、なけらにゃいけんと。この価値の、評価の差は、どうしても生まれてきます。

したがいまして、この世界で一番住みたいというこのテーマに向けては、できるだけいろんな人の希望を聞いて、かき集めて、その上で何回も出ますが、全体最適ですね。どうやったらみんなのこの思いを、できる限りこぼさないように包めるのか。これを考えていくことになります。

イメージというふうに聞かれましたので、なかなかこれという具体的な例が示しにくいんではあるんですが、私の感想で申し上げると、誰し

もがこの町で学校や家庭や職場ですね。その中でかけがえのない時間というのを過ごされたんじゃないかと思います。

先ほどの、この前のほうの答弁で少しお話ししましたが、私はその商店街のところで生まれ育ち、ときどき田んぼに帰るという幼少期を送ったんですが、もちろん学校もありました。吉田中学校、吉田小学校ですね。その全てに思い入れがあり、私にとってはかけがえのない時間でした。

そうした時間、そうしたものが、これからも特にこれから大人になっていく子供たちに、そういうものが等しく提供できるような社会、町、それがみんなにとって、世界で一番住みたいまちになるんではないかと思っています。

なかなか明確な回答とならず、恐縮なんですけれども、方向性としてはこのみんなの意識、これを統合する。これが実現するために必要な道筋だと考えている次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　答弁をいただきましたけれども、なかなかイメージ的に言葉で表すのは非常に難しい。特に住んでよかったと思えるまちというのは、それはそれぞれ市民の皆さんが感じられることだろうと。その住んでよかったと思えるまちをつくるためには、いろんな政策もありますし、これまでの歴史というか、そういう中にも考えていく必要があろうと思うんです。

政策上でいえば、当然、交流人口対策ということで、多くの市民の皆さんを呼び込んで、安芸高田市に来ていただき、そして住んでみたいと、これも一つのまちづくりの一つだろうと。政策の一つだろうと。

しかし一方、現在、私もですけれども、生まれ育って70数年。一歩も安芸高田市を出たことはありません。それはやはり地域に愛着を持ち、誇りを持っているからこそ、現実的にここで今住ませていただいておる。それは家庭の事情もあるかも分かりませんけれども、それぞれ。やはり、そういう愛着を持つということが、私は非常に大事なんじゃないかというふうにも思っております。その点について、市長どのようにお考えでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　町に対する愛着についてお答えします。

私などの小僧が申し上げるのも、甚だ恐縮ではあるんですけれども、自然と湧いて出るものなのかなと思っています。それは、まさに今塚本議員がおっしゃったとおり、長くここにいらっしゃる方であれば、当然その分だけ、強いんだと思います。

私は恐らくこの38年分、町の外に出たときもありましたが、それは途中で失われるもの、そういう類いのものではないと思っていますので、トータルでは38年分、この町に対して愛着があります。これがどこから

生じるかなんですけれども、先ほど少しお話しした、そこで何かいいことがあったという、この記憶に頼るんではないかと思います。

逆を言うと、物すごくつらくて、悲しくて、もう将来のことなんか考えられないよと、そんな環境に人はまた戻ろうと思わないはずです。思えないはずです。なら、その逆ですね。面白いな、楽しいな、こんなこともできるな、こんなこともしたいな。これも度々登場しますが、可能性、希望というものが、そのふだんの生活の中でちょっとずつでもいいんですが、感じられるならば、それは尊い時間、尊い経験と言え、それが自己肯定感と言ってもいいのかもしれないんですけれども、自分を肯定することができれば、自分を構成する要素として、この町ですね。生んで育ててくれた町、そこに対して愛着というのが、自然とこう浸透していくんではないかなと思っていますので、この愛着については、この前談の午前中の答弁でも少しお話ししたところですが、ふるさと学であったり、その全体としては教育ですね。

これから先の子供たちだけの話ではないんですけれども、私より上の諸先輩方におかれては、もう十二分なほど、愛着はお持ちでいらっしゃると思いますので、まだこれからそれこそ、私がこのたび、この町に戻ってくるときに、いろいろこの町について勉強しました。市役所の資料がホームページに出てるんですね。

その中では一つ、物すごく気になるデータがありました。中学生に聞いたアンケート調査なんですが、この町じゃないところに行きたいと、違うところに住みたいというのが過半数は超えてたと思います。私自身、大学で外の町に住みましたので、それ自体が悪いとは思わないんですが、やがて、やっぱり戻ってこようと、そう思ってくれるときがあると信じて、そうあるように願って、子供たちにはこの場所に愛着を持ってもらいたいですし、これからも持ち続けてもらいたいなと思ってます。少なくとも私は、私なりの愛着を持って、ここに戻ってまいりました。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　今市長のほうから愛着について自然に湧いてくるもんだというような答弁もありますし、私がこの愛着ということについて述べさせていただいたのは、やはり住み続けるためには、この愛着というのが非常に大事だろうというように思うんですよ。まず、現在住んでいる市民が住み続けたい。そして、ふるさとを思い、Ｕターン、あるいはＩターン、そうしたことをしたいと思うことが重要であって、市民一人一人が安芸高田市に住んでよかったという誇りや愛着を持つことだと思います。

安芸高田市には、神楽であり、田楽、そういった文化遺産。また甲立古墳であったり、毛利元就、郡山、そうした多くの歴史遺産。あるいはサンフレッチェ、そして湧永レオリックのハンドボール等のスポーツ。安芸高田市の名物や産品、たくさんあります。やはりこうしたものに小さいときから、誇りを持って生きることが、この愛着を持たすために、

必要なことだろうというふうに思うし、それを子供たちが誇りを持って住んでくれることが安芸高田市の発展に大きく貢献してくれると。

確かに、政策的に移住という手段をもって市外から呼んでくるというのも、それは政策的に必要かと思いますけれども、やはりそこに愛着を持たせ、それを醸成することが今後の安芸高田市のまちづくりには大変必要なことだろうというふうに、私は思っておりますので、市長は先ほど愛着というのは自然に湧いてくるものだということを述べましたけれども、私のはそういうような思いでこれまでも生きてきましたし、これからも生きていこうというふうに思っておりますので、常に愛着精神を醸成して、そして語り継いでいきたいというふうに思っております。

そのことが、誇りや愛着を持つことによって、本市が大好き、そしてそういう情報一つ一つを多くの皆さんが市外へ発信することによって、本当安芸高田市は住みやすい、そんな町だなということに関心を持っていただき、住んでみたい町になるんではないかというふうに私は考えておりますが、市長どうでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　この愛着の話から派生しまして、共感の仕方というんでしょうか。そういう観点で、今御質問を私は捉えたんですけれども。

一つ例えとしては、またうちの話で恐縮なんですが。気がついたときには、私の父が熱心にカープをテレビで応援してまして、やはり私も気がついたらカープを応援してました。これが実はいろんなところで通じるんじゃないかなと思ってます。

ほかの答弁でも申し上げたんですが、後継者の問題、担い手の問題で、自分がやりたくないことをほかの人にやってほしいっていうのは、ちょっと難しいんじゃないですかと申し上げたんですが、この逆ですよね。

自分がいいよ、好きだよって言ってるものは、近くにいる人にやっぱりつながっていくんだと思います。たった今、塚本議員が言及されたとおり、その思いというのは、まずはこの町の市民の人たち、安芸高田の人たちが、この町っていいよね。いいじゃないと、その思いをしっかりと確認するところから、そしてそれをみんなでそうだよねと確認し合うところから、まだこの町、安芸高田を知らない人にも発信していく、いけるのかなというふうに考えています。

ですので、この愛着の話なんですけれども、まだここから膨らんで、さらにもっと広がっていくと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　安芸高田市の広報10月号に、市長大きく出ております。世界で一番住みたいと思えるまちへということでありますが。ここで、何点か記者の方が質問されており、それに対して答弁をされております。まさに、これからのあるべき姿を市長、簡潔に述べられているというふうに思って

おりますが、我々あるいは次を担う世代の皆さんが、やはり安芸高田市の情報発信をしっかりすることが、やはりこの安芸高田市、将来、世界で住みたい町になるんではないかなというふうに思っておりますので、十分情報発信をしていただき、皆さんがそういう思いを住んでる人が常に持てるような、誇りが持てるような、まちづくりを目指していただきたいというふうに思います。

次の質問に入ります。

市長は選挙期間中、これまでと同じ政治か、新しい政治を始めるか、市民に求められていると訴えてこられました。

また、政策の基本は政治がしっかりしないと、どんな政策を考えてもうまくいかないとも発信され、新しい政治を始めると訴えてこられました。そこで新しい政治とは。私は政治というのは、継続だろうというふうに思っております。確かに時代の流れの中で、変革はあるかも分かりませんけれども、先ほどの石飛議員の総合計画の計画の時間の問題も述べておりましたけれども。

しかし、市長が変わられて、その市長の施策を反映するためには、というのも私も分からんことはないんですよ。しかし、あくまでも長いスパンで政治というのはやられていく必要があろうというふうに思っておりますし、特に、市長、財政のことを随分言われております。財源確保をし、次の事業に結びつけていくというのもあるわけなんで、全てが新しい政治というのは非常にちょっと私自身が分かりにくいところがあるんで、伺ってみたいというふうに思って、質問をさせていただきます。

まずは、当然、国、県との連携、これまで以上に密にしなくてはならない状況に今あるんではないかというふうに思いますが、市長はそのことについてはこれまでのしがらみを断ち切るというような言葉も発しておられます。そこらのところは、どのように連携をとっていくのか、伺ってみたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきました、新しい政治についてお答えします。

まず最初に、少しお断りをしておかないといけないんですが、前職のくせもありまして、非常に言葉というものに対して、私神経質な人間です。物すごく選んでしゃべりますし、選んで書きます。ですので、自分が言ったこと、書いたことは絶対に覚えてますし、言ってないこともまた、同様に覚えてます。

その意味では、私は一度たりとも、しがらみを断つという表現は使ったことはありません。

ちなみに、一つの例なんですけれども、こういう政治、新しい政治というのは、確かに何回も繰り返しましたが、私自身は若い力でとか、若さで、と主張したことは、これもまた一度もありません。私の発想はむしろ逆ですね。年齢は関係ないと。

また選挙の話に戻って恐縮なんですが、私を手伝ってくださった後援会の多くの方というのは、怒られるかな、全然若手じゃないですね。同級生も手伝ってくれたんですが、主力のコアのメンバーは、私の親世代のお兄さん、お姉さんばかりでした。つまり、年の多寡、若かったり、そうじゃなかったりしても、新しい政治というコンセプトは理解をしていただけたと思っていますし、またもっと大きく言えば、新しく始める、変えていくということも年齢を問わないんではないかと思っています。

その意味で、これから新しい政治というものを始めていくんですが、塚本議員が御指摘をくださった、その国や県との関わり、ここに話を寄せておきますと、非常にいい流れが来ているのかなと感じています。

まず、国のほうなんですけれども、結果は分かりませんが、今度11月、大阪で都構想という大きなテーマがありますね。結果は分からないんですが、地方分権という流れが着実に盛り上がってきていると感じます。そしてこれは、私も昨日数字を教えてもらったばかりのところですが、都市の若者が20何%だったかと思うんですが、3割近くの方が都市を脱出してみたいと考えている。くしくもなんですが、新型コロナの影響で都市部に住むことがリスクだと、高コスト、お金もかかるし大変だなと、その認識で逆流し始めそうだというのが今です。

その意味では、国をこの大きな流れとして、地方の自治体はこれまでと違う動きができるようになってきているんだと思います。その意味で、新しい政治、新しい政策を始めていくというところに重きを置いているつもりです。

もう一つ、お話させていただくと、やはり県ですね。これまでの答弁の中でも何回も出てきたキーワードなんですけれども、県との連携、これはもう必要です。非常に重要です。ただ、いつもいつも頼りに行くようじゃ駄目だと思ってます。

また、例えが至近で恐縮なんですが、盆や正月のときだけ小遣いをせびりに来るような子供じゃ、孫じゃいけんというやつですね。ふだんからちゃんと勉強も頑張っとって、部活もしっかりやっとる。だったら応援しちゃろうか、というのがいい形なのかなと思ってます。ちょっと例えが小さ過ぎて恐縮なんですけれども、県とこの一つの町、一つの市との関係も、似たところがあるんではないかと思ってます。

全部お願いします、お願いしますばっかり、それだけではなくて、こんなことやってるんです。こんなことやりたいんです。だから手伝ってください。力を貸してください。端的に言うと、お金をください。ようやくそこで初めて口に出していいんじゃないかなと思ってます。

さらに一歩踏み込めば、かなり風呂敷を広げますが、私はこの言うたら小さな町、この町でも何か成功例、好事例が生み出せれば、それは広島県全体をも牽引する、そういう役割が担えるんではないかと考えています。

ですので、今幹部をはじめ、職員といろんなところで議論をして、い

ろんな新しいアイデアを、何とかひねり出そうとしているところなんですが、この新しい取組が全部うまくいく、そんなうまい話はないんですが、一つでも成功すれば好事例として広島県に貢献できる。他市町をリードできる、そういう役割、そういう名誉ある地位を占めることもできるんではないかと思っている次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　私の勉強不足だったのかどうか分かりませんけれども。市長さん、市長に立候補されたときから、私も随分関心がありましたので、新聞記事は必ず全部取っております。

その中に、しがらみという、マスコミの言葉だったのかも分かりませんけれども、そういう一部は載っておりましたので、あえて質問の中に取り入れさせていただきました。市長自らが発してないということであれば、私の発言を取り消させていただきたいというふうに思いますけれども。

しかし、どっちにしても、国、あるいは県との連携というのは必要になってきます。市長就任以来、市長往来で随分市長さんの行動日程を毎日見ておりました。当選されて、何か月間、はっきり覚えておりませんけれども、県のほうへ御挨拶に行かれたという記事も見させていただきました。少し、遅かりしかなという気もいたしましたけれども、まずはやはりそこのところは人対人との付き合いというのは大事にしていただきたいというふうに、私は感じました。一も二とも、いうことはありませんけれども、できるだけ早くそういうところへの人間関係をつくるということについては、やはり直接会って、いろんな人との意見交換を交えて、やっぱり信頼関係を築かれるのが私は必要ではなかったんかなということを思っておりましたんで、あえてこの場で述べさせていただきました。

次の質問に入ります。

市長は、当選されましてから、この町はこれからどんどん変わっていく、期待してほしい。安芸高田市らしさ、特色をどのように考え、今後どのように進めていこうとされているのか、伺ってみたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問をいただきました、安芸高田市、その地域の特色についてお答えします。

ずばり端的に言ってしまうと、衰退、この2文字になろうかと思います。もちろん、いろんないい面はあります。それを十分承知した上で、あえて一言、特色というものを今この場で選ぶとするならば、その2文字です。

特色というのは、地理的だったり、文化的、歴史的、この町にいろんな色があるのは私なりに理解しているつもりです。ただ、それが一番最

初に目につくかと言われると、そうではなくなっているんじゃないかという思いです。

例えば、ボールペン、これ3色ボールペンなんですけれども、全体としてはボールペンです。でも実はこれ先っぽは、ぐしゃっとやってつぶれてしまってます。だとしたら、これは、もう書けなくなったボールペンですよね。仕掛けはすごく精巧なんです。3色出ますし、しかもこの金属、非常に高い金属で、色も物すごく特殊なインクを使っています。いいものなんですが、書けなくなってしまってるとすれば、これの総評は使えなくなったボールペンです。

今非常にあえて厳しい言葉を使って表現しましたが、これが現実ではないかと思っています。まずは、この厳しい現実を直視するところから、この町をよくしていく。その活動が始まっていくと思っています。

今後は、これまで長きにわたって、そのままになっていた問題、課題に、何とか取り組んでいくわけなんですが、その中で不安ではなく、希望に満ちた、そういう社会を構築していきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　今市長のほうから、特色をお聞きしました。残念でなりません。私はこれまで住んできて、特色は、安芸高田市の誇りはという質問に対して、衰退という言葉を聞いた以上、ここに住んでいた我々は、今までどんな生活をし、何でここに住んでいたんだろうかという思いがします。特色があってこそ、地域があるんだと、逆に私は思っております。そして、その特色が生かされてこそ、多くの皆さんが集い、そして町があるんだというふうに思っております。

だから、その特色を生かすまちづくり、確かに、昨日もありましたけれども、市長自ら合併して16年、旧6町の課題、速やかに解決しなくてはならないと。確かに、それは私どもも同じです。

しかし、合併をする前から、いろんな課題をほかへ、先人たちが知恵を出して、合併をしてきたわけであります。そして、16年の間、いろんな課題について、市民とともに協議し、議論をし、そしてまちづくりをやってきたわけでございます。この特色を聞かせていただいて、衰退という一文字で返されることは、大変心外に思っております。

市長、その言葉についてはどうでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　常に私の傾向として、短くまとめて言う気概がありますので、かえって理解が難しくなってしまう面もあるかと思います。その辺りは、改めておわびするとともに、これから先も気をつけていかないといけないなと思っているところです。

先ほどボールペンの話をしました。このボールペン。これ結構高いんです。いい値段します。じゃあどうするか。いいものが詰まってるから

高いんです。言いました。先がつぶれているから、使えないんです。だったら、先を変えたらいいんですよね。はい。それによって、このボールペンはよみがえるんです。触り心地もいいです。きれいな色も入ってます。3色使い分けられます。この特色を生かす生かさないは、ここを直してからですよね。

政治は、政策は、順番が大事です。これは何事にも通じることかと思うんですが、順番です。1、2、3、4、次は5です。いきなり7から始めようとしても、うまくいくわけがありません。どこで止まっているのか。見つけないといけないんです。それが、このボールペンであれば、先端部分。今この町の課題としては、この現状ですね。

何も問題がなくて、バラ色の市政が続いている。市民の皆様も十二分に満足されているんであれば、恐らくこの市政、政治、要らなくなることすらあり得るのかなと思います。課題があるから、悩みがあるから、私たちは今こうしてここに集まってきているんだと思います。その意味では、特色という言葉で、随分御不快な思いをさせてしまったところは、誠に申し訳ありませんでした。ただ思いとしては、私も塚本議員と全く同じところだと思います。ここに入っているせっかくのいいもの、これを生かしていきたい。その1点に尽きます。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　この件については、市長さんとまだまだ個人的にも、お付き合いをしながら、議員として話をしていきたいというふうに思っております。

それでは時間もありませんので、次の質問に入ります。

市長は、3本の柱として、昨日芦田議員の質問に答えておられました。政治の再建は市民の政治参加、そして都市開発は採算性の再検証、産業創出は人材の確保、ということを述べられております。

3本柱について、それぞれ市長の具体的な方向性をお持ちであれば、少し昨日も一般質問に出ておりますので、少し伺ってみたいというふうに思いますが、いかがでしょうか。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきました、3本柱、その政策の方向性について、お答えします。

昨日もかなりいろいろとお話をしてしまったんですが、改めて具体的なポイントを整理しておきますと、1つ目の政治再建、これは政治に市民の関心を集める、ここに尽きますが、例えば、一つ具体例を挙げておきます。

対象を絞った、限定した意見交換の場、これによってみんなが話をしやすくなるという効果が期待できます。特には、ＳＮＳ、要はスマホですね。それを活用して、ファシリテーター、壇上にいる人間と、観客席にいる集まった市民の方、一対多の場でありながら、双方向的に意見交

換ができる。なかなか言葉で説明しにくいんですけれども、そのような場を設けたいと考えています。これは、できれば年内、近々にでも、実現したいと考えているものです。

2つ目、採算性の検証です。これも昨日、御質問をいただいたところで、ちょうど重なるんですが、4つの事業というのがありました。なかなか悩ましい4つの事業。これについて、当然経営がなかなか芳しくないので、再建が、立て直しが必要なわけなんですけれども、どのようにそれを明らかにしていくか。市民と問題意識を共有するかについては、例えば一つの案ですけれども、経営状況を見える化、分かる化するというアイデアですね。売上、客数、原価、利益、つらつらつらと。しっかりと1枚にまとめてみれば、私も助かりますし、市民の方もこんなになってたんだというふうに気づいていただけるんではないかと考えています。

そして、3つ目の産業創出、人材の確保なんですけれども、これについては、やはり突破口としては、外部人材、そこに希望を持っています。関わり方はいろいろとあります。答弁の中で申し上げた点でいけば、サテライトオフィスですね。副業をしてもらいながら、副業を安芸高田市向けに始めてもらうという発想です。これらに共通して言えるのが、旧幣の打破となります。これも昨日使いました。

この響きが人によっては、んっ、と。けしからんなと。もしかすると感じられる方がいらっしゃるかもしれないんですが、これは先ほどお話ししたとおり、年の多寡は関係ない話です。改めて念を押して御説明します。

私自身が事実、年齢は平均的にはこの町の中で若いんですが、若いから云々というのは、僭越ながら考えたことがありません。同様に、私が一緒にこの8月戦ってきた仲間というのは、大先輩ではあるんですけれども、同じ意識を共有することができました。共に、あの取組を進めることができました。その意味では年の多寡ではないと。

古いものを捨てるというのは、若さであったり、そうじゃなかったり、があるのかなとついついつなげてしまいがちなんですが、つながりません。この中で、どこかニュース、テレビで御存じかもしれないんですが、片づけの話で、昨日お片づけという言葉を使いましたが、片づけの名人がいるんですね。こんまりというのをどこかで聞かれたことありますかね。こんまりメソッドという、これアメリカで人気に火がついた片づけ名人、女性の方です。近藤麻理恵さんだったと思うんですが、いらっしゃいます。その方がアメリカに行って、ばかでかい家の大掃除をするんです。見事に、ごみの山みたいだった家がすっきりきれいに片づくんですね。

ここまで聞くと、何かとんでもなく乱暴なごみ処理をやっとるんかと、思ってしまうかもしれないんですが、実態は全くそうではありません。このこんまりさん、家にあるものをざっと並べて、取っとくか、捨てる

か考えるんですけれども、捨てるとなったときどうするか。そのものに感謝をして、テレビの演出もあるんですけれども、ちゃんと丁寧にお礼を言って捨てられるんですね。

なので、この古いものから新しいもの、取捨選択、古いものは変えていかないといけないという発想あるんですが、決して過去を軽視するものでは、ないがしろにするものではないという点も改めてこの機会にお伝えさせていただきたい次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　3本柱につきましては、昨日の答弁とあんまり変化はなかったように思いますけれども。何はともあれ、やはり市民との共有、これが一番大事なんだろうというふうに思いますので、この3本の柱については、今後しっかり協議を重ねながら、対話を重ねながらこれを基本に、市の方向を向いて、政策に生かしていただきたいと、このように思います。

次の質問に入ります。

各部、各課がこれまで進めてきている政策の継続、これも昨日一般質問の中にも一部ありましたけれども、どのような視点で、見直しをし、市民にどのように周知、説明をしていくのか。お伺いをしてみたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　政策を見直す視点とそれの市民への説明についてお答えします。

まず最初に大変恐縮なんですが、お断りをしておきますが、同じ質問に対しては、基本的に同じような答弁となりますので、ぜひその点は御了承いただきたいと思います。

現在のこの安芸高田市を取り巻く環境としては、人口減少であり少子高齢化ですね。これが待ったなしで進んでいます。加えて新型コロナの騒動もあると。非常に厄介な状況で、これまで以上に厳しい見通しをベースにして政策を見直す必要があると考えています。

昨日の言葉、もう一回使えば、身軽で機動的な政策、体制、これを目指していきます。

市民に対する説明というのは、非常に重要です。繰り返し申し上げてますが、意識の共有ですね。今町がどうなってる。何が起こってる。それをしっかりとお互いが認知、認識できなければ、問題の解決は困難だと考えています。その意味では、まずこの課題認識、もっと言えば危機感を共有していきたいというのが私の思いです。

この市民の政治への参加なんですけれども、途中経過だけではうまくいきません。最終結論だけならもっとうまくいきません。やはり、最初から最後まで段階を追って常に話は進んでいくんですが、それを通しで包括的に説明をしていく、その工夫が重要だと思っています。

その意味では、市民の代表たる、議会の皆様には、これまで以上に市

民と双方向で意識を統合していくために、役割をとげていただきたいと思っています。

いつも、この職についてから、自戒するところなんですが、的確な判断を下すために、ありとあらゆる情報が必要です。ただ、御用聞きになってしまってはリーダー失格だと思ってます。なぜならば、リーダーというのは、リードする人なんですね。もちろん、話や意見は聞きます。ただ最後、決まったからには、それをしっかりと反対方向に伝え広めていく。この双方向性が何よりも重要なんだと思っていますので、私自身その覚悟で市政の運営に当たっていきたいと思っている次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　政策の見直し、あるいは市民に周知すると、周知、説明ということでお伺いしましたけれども、まさに今考えてみると、その各種政策の周知、説明がまだまだ弱いんではないかと、いうふうに思っております。

市長先ほど、政治の参加のところでおっしゃっていました若者とのミーティングですか。そういうようなことであったり、アンケートであったり、昨日もおっしゃってましたけれども、そういう意見交換、スマホ等々おっしゃられていましたけれども、私はそれだけで周知徹底が図られるとは思っていません。特に、広報紙等、いつでもお伺いしますと広報紙に載ってます。こんな広報紙見る者いないですよ。はっきり言って。これだけの情報たくさん情報が載ってます。市長御覧になりましたか。どんな印象ですか。どんな印象を持っておられますか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　昨日、家に帰ってみるとポストに入ってましたので、楽しく拝見しました。

それが情報誌として、どれほどの価値かというのは、なかなか評価しがたいところであるのは事実かと思うんですが。どうでしょうか。確か広報紙に関するアンケート、まとめたデータもあったかと思うんですけれども、市民の方にそれなりに認知もしていただいてますし、御好評というと、少し自画自賛が過ぎるのかもしれないんですが、楽しみにしてくださってる方もいらっしゃるように思います。

もし補足があればお願いします。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　やはり広報紙というのは、物事の周知徹底というのはやはり市民の皆さんが一目見て分かりやすく伝えられる、そういう広報紙じゃないといけないというふうに私思うんですよ。

特に、重要な政策、課題、市民の皆さんに周知をして、それを行政に生かす。そういう政策については、特にやっぱり簡潔に、情報を伝えるというところが必要ではないかというふうに私は昨日広報紙を見て感じ

たところでございます。

ホームページ、お太助フォン、あるいは広報紙、ＬＩＮＥによる情報発信など、広報の充実に努められていることは、承知しておりますけれども、一方ではこれまであった各地域での嘱託職員の予算や配置、そして回覧をするチラシ等は大幅に削減されております。市民に行政の情報の周知、徹底ができていないのではないかというふうに私は思っておりますし、またこれも大きな課題だというふうに思ってます。

こういうようなことをクリアすれば、今から進めようとするあらゆる政策、あるいは市民の皆さんの声を吸い上げることができるだろうというふうに思いますので、ぜひとも周知、徹底、あるいは説明を徹底的にしていくということを強く求めていきたいというふうに思っております。

次に、投票率の向上についてお伺いをいたします。

今回の選挙期間、市長は投票率を過去最高にと訴えられていましたが、実際には56.98％の投票率でございました。この率については、昨日も同僚議員の中でありましたので、答弁は差し控えてもらっても結構でございます。

2番目の向上に向けての考えを、昨日もありましたけれども、高齢者に対しての対策、対応策、そして若者たちの選挙離れに対する対策等々あれば伺ってみたいというふうに思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきました投票率に関してお答えします。

まず後段のほうなんですけれども、投票率向上に向けて、もちろん意識向上の啓発というのは大事なんですけれども、もっと具体的な措置としては、やはり移動支援ですね。ここが肝心になってくると思ってます。

あとは、これはもう国の対応を待つ状態ではあるんですけれども、今ちょうどデジタル庁というのが動き出しそうなので、電子投票で投票の在り方、もうその根底から変わるかもしれない。そこに期待をしているところではあります。

その前のところの投票率の低さなんですけれども、せっかくなので、感想といいますか、私の評価をお伝えしますと、非常に残念な結果でした。予想以上に市民の政治離れが進んでしまってたんだなと。かなり打ちのめされた思いです。

ただ、前回の市長選挙よりも1ポイントちょっとの低下だったんですね。ほかの市長選が軒並み大幅に投票率を下げているのを踏まえれば、そうした情勢の中にあって、幾らかは市民の関心を引き戻すことも引き止めることもできたのかなと多分に、自分よりな評価ではあるんですが、そのように捉えています。

また、これは公表してありますが、内訳を見ますと、年齢であったり、地域ですね。非常に示唆に富んだ面白いといってもいい数字が並んでいます。例えば、高宮町です。これまで選挙の投票率という観点では、ず

っと優等生だった、その町で、今回、投票率が大きく下がりました。ほかの町と比べてもへこんでいるんですね。ぜひこの辺りは、地元の地域の実情にお詳しいであろう方々に、しっかりと御意見を、評価を伺いながら、これから先取組を検討していきたいと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　この投票率を上げることについては、いろいろな政策的なものも必要だろうというふうに思います。

昨日も高齢者への投票環境、投票所の環境、移動式投票所であったり、そして移動支援であったり、投票所を動かすという言葉、これらも当然必要だろうと思いますが。特に10代、あるいは20代前半、そういう人たちへの政治に関心を持たせる、あるいは選挙に関心を持たせるために、当然今も期日前投票等々、土日はないんですか、土曜日はあるんですか。そういうときに、高校生の皆さんに立会人として、そういう選挙事務のお手伝いをしていただいて、選挙について、関心を持たせる。そういうような子供議会というのがありますけれども、昨日、2日前でしたか。選挙投票のことも学校の子供たちがやっているテレビ報道もありましたけれども、やはりそういう模擬投票、あるいは選挙事務に直接携わっていただいて、関心を持たせていくということも、私は必要なんじゃないかというふうに、私個人的には思ってるんですよ。それができるかできんかは、当然高等学校との関係もありますし、しかし、学校としても将来を担う子供たちが、そういう体験をするということについては、十分理解が得られるんかなというふうな思いもしておりますんで、ぜひともそういうようなことも考えていただいて、若者たちが選挙事務に従事していただくような、あるいは期日前投票等を本当身近に感じていただくような対策が私は今後必要なんじゃないかと思うんですけれども、市長そこらどうでしょうかね。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　今御指摘をいただいたところなんですけれども、塚本議員のおっしゃるとおりだと思います。

年代別に区切ってみますと、10代から20、30代ぐらいまでが大きく数字はへこんでいるという状態ですので、特にその政治に対して興味を持ち始めるあたりで、教育の一環でそれをしっかりと理解してもらうというのは、とても大事な、しかも効果がある取組だと思っています。

ただ、少し留意が必要なのは、若者の政治離れと一言で切ってしまうのも、また危険です。なぜかというと、皆さん恐らく関心がある方は選挙結果、数字、ホームページに載っていますので、御覧になったと思うんですが。美土里町の18歳だったかな。10代。物すごく投票率高いんですね。確か70％近かったように思います。なので、美土里町は大体60代ぐらいだったと思うんですが、ここが山なんですけども、80代が下がる

と。なんですが、この18だけぴょんと高いんですね。

物すごく気になって、いろんなつてを頼って、美土里町の18歳に聞いてみました。ただ、残念ながら、まだ要因がつかめていません。一つは、推測なんですけれども、サンプルが少ないんですね。美土里町の18歳、18人とかだったと思うんですが、数字が振れやすいという傾向はあります。ただ、それにしても10何人いる人がうわっと選挙に行ったというのは、何かあったはずなんですが、いろいろと聞いてみたんですが、私が最初に思ったのは、まさに今議員に御指摘いただいた、学校といいますか、大人がその学年に対して、政治やるよと、選挙行こうぜと声をかけたのかなと思ったんですが、どうやらそうではないみたいなんですね。

なので、友達同士の、のりというんでしょうか。何かつながりでそういう動きになったのかなと思うんですけれども、そういった特異な例なんですけれども、そういう動きもありますので、一概に若者が選挙から離れてるというわけではないんだなと、これも一つの事実ですので、こういう状況をいろいろ数字を見ながら、投票率の向上、その策を検討していきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

塚本近君。

○塚 本 議 員　選挙の投票率の向上に向けては、あらゆる施策、施策というか、市長、具体的に昨日、高齢者支援であったり、移動投票であったりというようなこともおっしゃってましたんで、ぜひともそういうこともやっていただきたいと、次の11月に向けて考えていただければというふうに思いますが。

昨日もちょっと難しいんかなということもおっしゃってましたけれども、前向きなお考えをしていただきたいと思います。

最後になりましたけれども、市長さんにおかれましては、これまで議員それぞれ一般質問に対しまして、より分かりやすく、具体的な例もお話ししていただきながら、私どもにも非常に分かりやすい答弁をされてこられました。今日まで、先ほども述べましたけれども、合併して16年、いまだ旧町の課題を引きずっておりますけれども、この課題に向けて政策を断行していただき、市政を改めてというか、再度挑戦をしていただいて、市民の皆さんの安心、安全、市長へ期待をしておりますので、ぜひともその期待に応えていただきますよう、諸課題に向けて頑張っていただきたいということをお願いするとともに、行政、議会、市民が一体となって、安芸高田市に住んでよかった、住みたい町、安芸高田のために、一緒に頑張っていこうではありませんか。

以上で、私の一般質問を終わらせていただきます。

○山 本 議 長　以上で、塚本近君の質問を終わります。

この際、15時まで休憩といたします。

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

午後　２時４５分　休憩

午後　３時００分　再開

～～～～～～～～◯～～～～～～～～

○山 本 議 長　　休憩を閉じて会議を再開します。

続いて通告がありますので、発言を許します。

8番　児玉史則君。

○児 玉 議 員　　8番、無所属の児玉史則です。

市長とは初めての一般質問になります。どうかよろしくお願いいたします。

なお、御承知のとおり、11月には議会の改選がありますので、これが最初で最後の質問になるかもしれませんので、一つ率直な御答弁をよろしくお願いいたします。

また、これまで同僚議員が同様な質問をたくさんしておりますので、重なる部分が非常にあろうかと思いますが、一つ御容赦いただきたいと思います。

市長が財政健全化に問題意識を強く持っておられ、行革をまず、市役所の改革から進められるということは、国がデジタルトランスフォーメーションを進めようとしておりますけれども、このデジタルトランスフォーメーションが目指す、アナログ行政の中身の変革、業務、組織、行政文化の変革を行うことだろうと理解し、知恵を出す行革に積極的に取り組んでいただきたいと思いますし、応援していきたいと思います。

本日は、安芸高田市の財政に影響を与えている第三セクターに対する考え方を1点目に伺ってみたいと思います。

地方では、民間で事業を起こしてくれる目ぼしい人がいないから、まずは先行投資などで行政が頑張るという話は、一見理解を得られやすい話ですが、しかし行政が頑張れば頑張るほど、民間は行政に依存してしまうという矛盾があります。

これが地方創生事業における難しさでもあり、一番の問題でもあろうかと考えております。見た目では分からない。一見、民間の事業活動なのに、実際は行政支援が行われ、それが見えない形で地域の生産性を低下させているという矛盾。それが第三セクターであるように思います。

それぞれの第三セクターの赤字が続き、債務超過に陥る状況も見受けられることから、今後厳しい経営判断も必要かと思いますが、当市の第三セクターの現状を見られ、どのような感想をお持ちか、伺ってみたいと思います。

○山 本 議 長　　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　　これが初めての答弁となりますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

第三セクターについての御質問にお答えします。

御承知のとおり、半官半民の組織ですね。当市においては、幾つかあるんですが。経営状況は決してよろしくありません。かなり芳しくない

状態です。

その意味では、当市として、これから先、事業そのものであり、経営、そちらに対して大きな責任を担っていますので、それを行使していきたいと思います。責任に見合う経営判断ですね。していきたいと思っています。

例えばなんですけれども、半官半民、民のほうでいえば、もう5年や10年近く赤字が続いてるような企業があれば、これはもう責任問題で、経営陣刷新というのがあっても、全く不思議ではない。むしろ、あるのが当然といったところですので、それは最終的な判断ですね。もちろん、地域への波及効果、半分官営ですので、公共事業ということは、採算性だけではないという面もあります。

ですので、地域の中における意義、こちらも併せて考えていきたいんですが、すいません、また逆説を使ってしまうんですが、今児玉議員が御指摘くださったとおり、地域の生産性を落としてしまっている。地域の重しになっている面も私にはあるんじゃないかなと思えてなりませんので、総合的に、多面的に、評価して判断をしていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　市長は金融のプロですから、当然、経営指標を見られれば、経営状態というのは即お分かりだと思うんです。

第三セクターというのは、税金でやはりやられる事業です。当然、普通に民間が事業としてやる場合だったら、施設っていうのは施設開発するんであれば、施設整備の初期投資分はこれは回収しようと考えるのが、民間の当たり前の考え方なんですが、第三セクターっていうのは、これ初期投資分は稼ぐ必要がないという前提になってますから、事業計画の段階からあまり売上げを上げなくても成立するというような環境でスタートしてしまうわけです。

結局のところ、第三セクターの損益が上がらないっていうのは、損益分岐点が非常にゆがんだ形で、通常よりも低い水準で容認され、生産性が低くても、維持可能な環境が出来上がっておるというところにあるんだろうと思います。

費用対効果ということで、よく説明があるんですが、結局のところ、投資収益率といった考え方が、全くこれ入ってないんですね。いわゆる想定の効果金額の積み上げか、定性的効果、こういったところで判断する。極めて非論理的な考え方で投資を行うか。行わないかを判断してきているというのが実態だろうと思います。

田んぼアート事業の見直しは、昨日言われておりましたけれども、それはコロナによる経済環境の変化に起因したような説明をされてましたが、実際にはもう市長の目から見たら、恐らく経営計画を見られたら、これはもうやったら、はなからやるべき事業ではないということは判断

されてるんじゃないかと私は思ってお聞きしとったんです。

そういった今後、こういった第三セクターの話があるかどうか、分かりませんけれども、やはり投資収益率の判断基準とか、そういった投資の判断を行う、例えば投資収益率が低くても定性的効果が例えば大きいと考えればやるとか。そういった仕組みが、今の行政にはないんですね。民間企業だったら、当然そういうことがシステムとしてあって、仕組みがあって判断するわけですが、行政にはそういう仕組みがありませんから、非常にどこも止めることができないんです。執行部側も我々側も判断ができない。そういうところは、ぜひつくっていく必要があるんじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　今既に私がお答えすべき内容、児玉議員があらかた御説明下さったんで、なかなか付け加える言葉が限られるんですが、最後のところにありました、行政、特に三セクですね、に対する経営、事業評価というのは、長年のテーマになってます。テーマというのは、学術的なテーマですね。私、大学で経済学を学んでいたんですけれども、そのときに財政学、行政等々、科目としてはあるんですが、ピンとくるそういうシステムっていうのは、やっぱり見かけませんでした。

最近、生まれたかというと、私が知り得る限りでは具体的な聞く指標、アイデアというのはないんではないかなと思っています。例えば、公害とかですね、ちょっと話が一旦脇にそれるんですけれども、あれは外部不経済という言葉なんですけれども、工場、企業はそれ自体商売してますと。ここはここでハッピーなんですけれども、この煙がよそに行くと、ここの人が迷惑をしてしまうと。これ外部不経済ですね。外部に迷惑がかかる。これは全体としては、よくないんじゃないのということで、この煙の迷惑分も企業のほうに責任を持たせましょうというような発想は、昔からあります。

ちょっと拡大すれば、排出権取引という言葉、最近新聞、ニュースでもよく出ますけれども、二酸化炭素の排出権です。権利として、取引ができるようになっています。二酸化炭素をいっぱい出す、出したい、出さざるを得ない企業は、エコをやってる企業から権利を買うんですね、お金で。ちょっと腑に落ちないと思われる方もいらっしゃるかと思うんですが、権利を買えば、売ったほうはお金が入ります。入ったお金でよりエコなシステムをこっちはつくれるんです。

もともと買うぐらいですので、例えば二酸化炭素をたくさん出した企業というのは、削減の余地が小さいんです。なので、お互いに融通することによって、全体最適を図ろうと、こういうアイデアはありますが、この三セクに関しては、なかなか進んでいないという認識でいます。

じゃあどうしているかなんですけれども、これもそれこそ私が生まれるぐらい前からある話ですが、民営化ですね。鉄道であり、通信であり、

もろもろがそうであったと。やはり民にしっかりと寄せる、この発想が最終的には実効性がある取組になるのかなというふうに思ってますので、すぐ今抱えてる三セクを民営化というのは、非常に難しい、それこそちょっと厳しい表現を使われましたが、非論理的な理由でできてるがゆえに、決着をつけること、この先どうするかというのも論理じゃない面が多々あります。なので、難しいんですけれども、最終的にはなるべき官の要素を排していくというのが、解決策になるんではないかと考えてる次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　私も市長の考えに全く同感です。

本来、コロナで景気が落ちてないとすると、この第三セクターをどうやって、どう持っていくかと考えたときには、やはり無償でもいいから、民間で受けるところがあれば、全て民間に譲って、経営は全部民間でやっていただくと、これが一番いい方法じゃないかと思ってましたが、今の状況では、これはとても難しい。

それから、以前の市長は、これを福祉施設で利用したらどうかという発想もあられて、いろいろやられてましたけれども、やはり経営状況は、それではとても改善はしないと。そういった流れの中で、どんどんどんどん時期が過ぎてきますと、これは今度は第三セクターの長寿命化計画、こういうものが立案されてくるわけです。15億円の改修費が見込まれておるわけですが、ここまでかけて継続するか否か、もはや判断は待ったなしだろうと思うんです。

まだ市長になられて2か月ですから、非常にこういった判断っていうのは難しいと思いますけれども、仮に継続が難しいと判断された場合、当然、利害関係者に説明をして納得してもらわなければいけないわけです。納得が得られないとなると、これは勇気を持って決断して、それから行動する。今日の午前中でしたか、昨日でしたか、覚悟という話がありましたけれども、私は人間の背骨の部分、判断する背骨の部分は、選択の連続の中から来るんだろうと思ってるんです。我々生まれてからずっと毎日生きてますが、何かを常に選択していくわけですね。どっちに行こうか、こっちに行こうか、いいか悪いかと。選択した結果で、自分の中に身についてくるものが背骨として1本できてくると。その中に信念というものが生まれてくるんだろうと。それが一つは覚悟につながっていくと。そういうものがトップとして、あるいは政治家として私は求められておるんだろうと。

そういう観点から考えると、これは覚悟を持って行動していかなければいけない事案であると。昨日、出血を止めなければいけないということを真っ先におっしゃってましたが、全く大賛成で、その止血の部分から考えると、これはぼちぼち決断する時期に来ておると、2か月の市長にこういうことを申し上げるのは、大変申し訳ないんですが、そういう

判断を私はしております。市長の御見解を伺ってみたいと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　今背骨のお話をしていただきまして、少し不思議な表現を使いますが、勇気を頂いた、そんな気持ちでいます。というのは、このたびの8月の選挙です。決断をするために、立候補をしました。この町の政治、政策、変えていかないといけない、新しいものを始めないといけない。その思いで選挙に出て、そして今この場に立っていますので、今御指摘いただいた判断ですね。確実にやっていきたいと思っています。

ただ少し裏話ではないですけれども、この就任して1、2か月の間に、職員からいろいろレクチャーを受けました。その中で、課題、案件、こんなのがありますという紹介をしてもらうんですけれども、基本様子見というような、そのような表現は使ってないですよ。と、私が受けとるような案件を見かけました。その一つの例がその三セクです。なぜか。これは職員の方が気を使ってくださったんですが、これは政治生命かけざるを得ませんよと。進退を問う、そういうテーマですというふうに御配慮くださったんですが、私としてはそのために、ここに戻ってきましたので、この任期4年間の間に私が負託を受けたという立場にありますので、しっかりとその負託、責任を果たしたいと思ってます。

もう少し具体的な話を、少しだけ付け加えさせていただくならば、この三セクの問題、この前のところの御指摘でもありましたが、新型コロナの影響は、あくまで追加的な話です。基本の問題、根本の問題というのは、もっともっと前からありました。経営状況だけ数字で眺めてみても、昨日、今日、今年や去年始まった経営悪化ではないんですね。その意味では、この三セクも含めて、しっかりと片づけ、取り組んでいきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　おっしゃるとおり、大変な覚悟が要ると思います。旧6町時代につくったものですから、当然その当時は町別では、それが全体最適だった。ところが、合併することによって、それは部分最適になって、全体最適にはならんようになっとるということですから、これは当然、それなりの覚悟を持って、取り組んでいただく必要があろうと思いますが、2か月目の市長に大変酷な質問だったかと思いますが、一つこの4年間で結論をぜひ出していただきたいと思います。

2点目の選挙公報記載事項に関して伺います。

市長は、選挙公報の中で、芸備線や吉田病院の経営状況に関し、感想を述べられておられました。確かに、中山間に位置する施設や設備は、採算が非常に苦しい状況にあるのは確かですが、高齢化が進む当市にとっては、公共の移動手段や病院の重要性はこれまで以上に重要になってくると思いますが、市長はこの現状をどのように捉えておられるのか、

改めて伺ってみたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきました公共交通機関等と病院等に関するお話をさせていただきます。

それこそ選挙のときなんですけれども、私が芸備線の廃止や、病院の統廃合を主張していると誰かが言っているというふうに耳にしました。

ただ、先ほど申し上げたとおり、私はそのような言葉を使ったことは一度たりともありません。なぜか。この公共サービス、公共投資もなんですけれども、地方にとっては絶対に要ります。地方というのは、端的に言うと、人口密度が低いんですね。薄く散らばっているという状態。こういう環境では、民間が商売をしにくいんです。だからこそ、公のサービスが必要になってきます。

ただ、そうは言っても、この不採算、その事業を放置してしまうと、そのしわ寄せがほかに出てしまいます。当然、巡り巡っては、その事業そのものも続けられなくなってしまう。だとすると、みんなが大事に思っていたものが、そのうちなくなってしまうという、非常に残念な結末に向かいかねないということで、採算性を見直す。もう一つ、進んで言うと、持続可能な形にしていく。その下調べ、これが採算性の検証と、私がお伝えしている真意になります。

それこそ、鉄道ですね。高宮町を走っている三江線というのは、非常に惜しまれつつも廃線となりました。ただ当然、民間の鉄道会社さんの経営の判断なので、それ以上、その時点では申し上げることがないんですけれども。だとしたら、惜しまれつつも、となるんであれば、その前にやっぱり何とかすべきだったんじゃないかなと思います。

かなり、山の奥のほうの路線ですので、簡単ではないというふうには承知しているんですが、例えば、まだこっちを走ってます芸備線ですね。広島と三次をつなぐ線ですので、この間がどうこうというのは、しばらくないだろうなとは思うんですけれども、その先、あれまだ長いんですけれども、見渡してみると、もうニュース等でも昔から言われています。非常に赤字路線だというので有名だったりしますが、その辺りはどうしても存続が難しいという話にもなりかねない。それを考えると、ちょっと三セクから鉄道、公共交通のほうに話が飛んだんですけれども。

この地方にとって、市にとって、必要なものが何か。それは今現時点であり、これから先も必要なもの、それをしっかりと認識して、その採算性、当然いいほうがいいので、ちょっとでも改善できるように、検討していきたいと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　市長が民間出身で、しかも金融機関の出身になられて、そこの中で採算性ということを非常に言われて、いろいろなところで話が出るわけで

すね。

そうすると、皆さん思われたのが、日産の元社長、イスラエルのほうに行かれておる、あの方ですね。コストカッターと異名が。そういうような認識で、その説明が不足するととられるんですね。今のようなしっかりとした説明、あるいは、今日の山根議員なり、あるいは塚本議員のときにもありましたけれども、説明の仕方をもう少し丁寧に。サラリーマン時代というのは、当然、結果から報告しろ、要件だけ、要点だけ言えと、こういう教育を受けられてると思いますけれども、我々のような行政の扱ってる一般市民の方というのは、懇切丁寧に話をしていかないと、なかなか真意が伝わらんのだろうと思います。

そういった意味では、私は今回の一般質問いろいろ答弁を聞きながら、考えるのは、市長にもう少し自分の思いが伝わるように、あるいは人に分かるように、理解していただくように、もう少し丁寧に御説明が要るんじゃないかと思うんですが、この辺いかがでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御指摘、御助言、大変痛み入ります。

ただ非常にまた、生意気なことを申してしまうと、あえてそうしてるところは多分にあります。例えば、先ほどの選挙期間中の書き方ですね。恐らく皆さんが想像される以上に、あれ全部自分で文章考えたんですけれども、物すごく時間をかけて考えてます。

その結果、あえてあの書きぶりにしました。なぜか。今日、こうしてこの場で、こういう形で話題にしたかったからです。選挙に通りたいなら、もっと聞こえがいい、耳に優しい話をすればよかったんですが、私は市長になってから、市政を刷新する、政策をさらに前に進めていく、そのつもりでいましたので、あえて、引っかかりが出るように、あの場では表現しました。実際、私の思惑どおりというのはあるんですけれども、向こうのほうでは、揚げ足を取っていただきまして、芸備線の廃止とか、病院の統廃合というのを話題にしてくださいました。非常にありがたかったです。

つまり石丸という者は、この新市長というのは、何をやらかすか分からんな。もちろん期待をされる方もいらっしゃるんですが、不安に駆られる方も多いと思います。ただ、私は両方使いたかった。期待してくださるのは非常にありがたいです。味方は多いにこしたことない。ただ、一部の人の応援では足りないんです。市民総出で、それこそ今回私は8,067票の支持をいただきましたが、その一方で、5,000という数字は反対を応援されてたんですね。その5,000がこれからも政治にずっと関心を持ち続けていただくためには、その仕掛けが必要なのかなと思いました。

これは目を離しちゃいけんねと。市民2万8,000人、全員に好きも嫌いも含めてです。興味関心を持っていただくために、また重ねてこのよう

な生意気なことを申し上げています。平に御容赦いただければと思う次第です。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　きれいに市長の作戦にはまってしまいましたけれども、真意は分かりましたんで、ぜひそこらのところは、また皆さんにもお話ができるだろうと思います。

もう一つ、市長は世界一住やすいまちを目指すと掲げておられ、いろんな要望が、希望が皆さんあると、いうようなことをおっしゃってました。私は一つには、住みやすいまちの一つの条件としては、やっぱり都市部への移動、それからあるいは都市部からの移動が便利なことが条件に入るのではないかと思ってます。

特に、広島市の郊外である、この安芸高田市は、広島市へのアクセスは大変重要な要素で、中国縦貫道、国道54号線、そして芸備線があるわけです。1時間あれば行き来ができる。今後の安芸高田市の住環境にとっては、非常に大きな強みじゃないかと私は思ってるんです。

その中で、芸備線は、今広島駅が非常に拡張をやってまして、もう八丁堀や紙屋町に行かなくても、広島駅でほとんど、ことが足りる。さらに、あそこに市内電車の発着場も設ける。それから、北側に病院を建てる計画があったり、再開発をまだまだ進めていく計画になってます。

それから、基町にサンフレッチェのグラウンドができる計画も上がっております。カープの試合があると、芸備線の中はもう三次からほぼいっぱいになったりするわけですが。そういった意味で考えますと、もう一つ吉田から向原にトンネルがつきますね。そういったこと考えますと、向原駅っていうのは、非常に安芸高田市の玄関口、いわゆる送り出しの部分として、送迎口としては大変重要になってくるんじゃないかと。

一方で迎えるほうというのは、昨日もお話されてましたけれども、コワーキングオフィス、この利用を広島市の方にしていただくという視点から考えていくと、芸備線が今度は玄関口になってくる。そういったことを考えますと、この安芸高田市内の循環していく移動を、もう少し向原町から便利にしていくと、さらに広島市から来られる方の玄関口としての利用価値がどんどん上がってくるんじゃないかと思うんです。

そういったことも長期的な視点で考えていく必要があるんじゃないかと思うんですが、その辺いかがでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　引き続いて、もうお答えを言っていただいている状態なんですけれども、御指摘のとおり、向原町の重要性、今後ますます高まっていくと考えています。

向原に限らず、私がこの町を見たときに、いつも気になるのが、八千代町という場所です。安佐北区の上にあって、広島市内からすると結構

近い場所にあります。ここまで、吉田の中心まで来ようとすると、さらに20分ぐらいかかるので、その分だけ近い、便利なところにある。違うルートを探せば、千代田のインターですね。高速を使えば、例えば土師ダムぐらいまでですと、本当に広島市内から1時間かからない。4、50分ぐらいですかね。高速降りてからも含めて。

非常に便利なところに、この町はある。隣接している部分がありますので、その辺りは有機的にうまくお互いを生かせるようにつなげていく工夫が必要ではないかと思ってます。真ん中には54号線が走っていて、悩ましいのがバイパスと高速と駅というのが、横のつながりがなかなかないので、その辺りは大きな課題ではあるんですけれども、それぞれのアクセスは、今お話しいただいたとおり、非常に可能性を秘めていると思っていますので、何ができるか、検討を進めていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　次の質問に移ります。

第3点目は、小中学校におけるコロナの対応について伺います。

まずその第1点目で、端末の活用方法について伺います。ＧＩＧＡスクール構想で2020年度中に1人1台学習端末を配備する計画が進んでいますが、一斉休校が長引いたことで、大量の自宅学習が各家庭に要請され、また変則的な授業を余儀なくされ、夏休みの短縮など、授業の遅れを取り戻すのに先生方は必死な状況であろうと思います。

しかし、この遅れを取り戻すために、リアルの授業とオンラインを組み合わせるといった計画は聞くことがありません。ハードの充実が進みそうですが、それに合わせたソフト面の計画が必要と思いますが、教育長の御見解を伺います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

教育長　永井初男君。

○永井教育長　児玉議員には、これまで何度も質問を頂いておりまして、代わり映えがしないかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

ＧＩＧＡスクール構想による1人1台端末導入後のソフト面の計画について、お答えをいたします。

本市における情報教育は、ハード面の整備は、この間の教育ＩＣＴ化推進事業の取組により、一定程度整ってきていると認識をしています。

また、今年度は、家庭学習用に、Ｗｉ－Ｆｉ環境が整っていない家庭に対する貸与型のモバイルルーターや、学校が使用するカメラやマイクなどの通信装置の購入など、既に予算措置を講じており、学校臨時休校等、緊急時における家庭でのオンライン学習環境の整備に努めているところです。

一方で、議員御指摘の、学校での活用計画の具体は、これから作成することになります。研修や教材研究をしていく中で、1人1台端末が学び

の質の向上の有効な手段となるよう、準備を進めていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　ぜひ活用方法を考えていただきたいと思います。

現時点で、文科省の政策っていうのは、ハード整備に偏重していることで、機器の整備だけが何となくＧＩＧＡ構想の目的なんかなというように見えてしまう。それをどう活用していくかという視点が、非常に文科省の中のいろいろな話を見てみても弱いような気がしております。

ＩＣＴ教育では、リアルの授業と、オンラインを組み合わせるためのカリキュラムの改革が重要でありますし、機器上で先生や友達とどう時間を共有していくのか。教材ソフトの用意はされているのか。あるいは課題を提出、添削、フィードバックする仕組みはあるのかといったような問題があるように思います。

文科省は、こうしたソフト面の対応は、どうも自治体任せのように今のところ見受けられるわけです。先生が教室と同じように、インターネットで家庭と結んで、授業するということだけでなくて、リアルタイムの授業だけでなく、クラウド上の電子掲示板に子供が作品をアップし、質問や意見などを書き込み、議論するツールと組み合わせ、教室で教える授業と自学自習やグループ活動などの両方をテクノロジーで実現していく。先生から教えてもらうだけでなく、子供たち自身が主体的に教材で学習したり、議論したりするなどの、子供中心の学習感に基づいた、システムづくりが要るんだろうと思います。

こういったことは、文科省や県教委の指示を待っとっても、どうも出そうになく、それならば、これ教育長、最も苦手な範疇でしょうけれども、安芸高田市バージョンを率先してつくって、安芸高田市流を広めていったらいいんじゃないかと私は思ってるんですが、そこらまで取り組まないと、せっかくハード機器を入れても、宝の持ち腐れになってしまうというような気がしておるんですが、いかがでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

教育長　永井初男君。

○永井教育長　児玉議員御指摘のとおりでございまして、このたびのＧＩＧＡスクール構想というのは、ソフト面のことを大きな目的に置いとるというよりも、御承知のことだと思いますが、いわゆるこのたびのコロナ禍における学校の長期にわたる臨時休校、そういったときに、学びが止まることがないように、各家庭においてでも、いわゆるＩＣＴ機器を活用した学び、学習ができるようにという、それが大きな目的になっております。

そういったところもあって、機器を整備するための予算はかなり今回、国がつけておりますが、いわゆるソフト面、研修費等の予算というのは、それに比べて少ないというふうに、私自身も理解をしております。

ただ、広島県は、いわゆるアメリカＧｏｏｇｌｅ社の「Ｇ　Ｓｕｉｔ

ｅ」という取組を今進めております。この「Ｇ　Ｓｕｉｔｅ」というのは、Ｇｏｏｇｌｅ社が提供しておる教育支援サービスの総称になるわけですが、いわゆるインターネット上で利用可能なクラウドサービスということになります。結構、私も勉強しております。

その利用できる主なサービスとしては、大きく2つあるんですが、そのＣｌａｓｓｒｏｏｍというのと、Ｍｅｅｔというのがございます。Ｃｌａｓｓｒｏｏｍというのは、この安芸高田市内でいいますと、もう既に県立吉田高校とか、向原高校は取り入れております。義務教育、小中学校の教員もそちらに派遣をして、今研修を積んでおるところでございます。

したがって、9月に議会で承認をいただきましたように、12月25日を納期の期限としておりますが、約2,000台のタブレットが入ってきます。これが入ってきたら、いわゆるこのＧｏｏｇｌｅ社のＣｌａｓｓｒｏｏｍ、あるいはＭｅｅｔを使って、ふだんの学校教育における学習においても、有効な、いわゆるオンライン学習ができるように、非常時に備えて、訓練も含めて取組のほうを充実させていこうというふうに考えております。

ただ、現在、手元にないものですから、なかなかその機器を使った研修というのが積み上げることができないという状況にあります。そうなってきた場合に、今年度中にまた第三波といいますか、臨時休校等を余儀なくされるということにおいては、まずは中学校3年生には、全ての生徒、家庭に貸与できるだけの機器と、いわゆるルーター等を貸出しできるように今台数のほうは確保しております。

もう少し今年度中に努力していこうとしておりますのが、今度は小学校6年生のほうです。タブレットについては、既に確保できておるんですが、家庭にインターネット環境等が整っていない子供たちに貸し出すルーター等は、中学校3年生に貸し出すと若干まだ不足するかなと予想しておりますので、今、購入を急いでおるところでございます。

何とか、議員御指摘のように、国、県の指示や方向性を待つということではなく、安芸高田市独自で、取り組めることを積極的に取り組んでいきたいというふうに考えておるところでございます。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　大変失礼しました。不得手と申し上げて、反省しております。

オンライン学習は、今クラウドも活用して進めていくということですが、一つは当然心配があって、家庭で遊んでいて、子供たちが家庭で遊んでいても、寝ていても、これは誰も親がいなかったら注意してくれないわけですね。自分をコントロールする力の有無によって、極めて大きな格差を生む不安もあるんだろうと思います。

しかし、それを恐れてると、それは情報社会の特質でもありますので、そういったことをいろいろな課題は出てくると思いますが、都度都度、

対応を考えながら、ぜひ進めていっていただきたいと思います。
　では次の質問に移ります。
　2点目の手洗い場の蛇口に関して伺います。
　新型コロナウイルスの感染対策として、学校の手洗い場の蛇口について、ハンドルを手でひねるなどしなくてもいい、非接触型の自動水栓を導入するべきと思いますが、教育長のお考えを伺います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。
　教育長　永井初男君。

○永 井 教 育 長　学校の手洗い場の蛇口についての御質問にお答えをいたします。
　現在、学校では、新型コロナウイルス感染症対策として、三密の回避、マスクの着用、手洗いなどを徹底し、様々な工夫を講じています。
　今年度、発注しています、小学校のトイレ洋式化改修工事では、センサー式の電灯や手洗いの自動水栓を採用するなど、新しい生活様式に配慮した、非接触型の機器導入を進めています。
　今後も、担当課等と協議を重ねながら、順次、改良をしていきたいと考えているところでございます。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。
　児玉史則君。

○児 玉 議 員　国も感染予防防止のために、トイレなどの整備に補助金も出してますから、ぜひ活用して、早く進めていただくことをお願いしておきたいと思います。
　第4点目の次の質問に入ります。
　第4点目は、市長に、市民と行政の懇談会について伺います。
　これはもう同僚議員から同様の質問が出ておりますが、ちょっと御容赦いただきたいと思います。
　現在、市議会では、地域懇談会という形で、1年に1回市民との意見交換の場を設けています。しかし、行政、執行部と市民の皆さん、あるいは市長と市民の意見交換会等、意見を聞く場がありません。
　市長の声を直接聞くことは、ぜひ必要と思いますが、市長のお考えを伺ってみたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。
　市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきました市民とのコミュニケーションについてお答えします。
　まず、せっかくの機会ですので、少し宣伝をさせていただきたいんですけれども、市民の意見を聞く場、行政が、市がですね、実はあります。市役所や各支所に御意見箱という、そのままの名前なんですけれども、箱が、本当に箱が置いてあります。この市役所ですと、市民部の前だったかと思うんですけれども、木の箱が置いてありまして、備付けの紙まであります。多分書くものもあったので、そこでさらさらっと書いていただいて、投函すれば、これは私のところまで届きます。実際、これま

でも、ちょっと数覚えてないんですが、何通も拝見したところです。
実際に、御意見箱と別のルートで、要は投書で、市長宛でお手紙をくださる方もいらっしゃるんですけれども、それも全量拝見をしています。その意味では、市民の方の御意見、受け取れているところは、既にあるにはあります。
あと違うルートでは、市のホームページと言われるものです。ＷＥＢサイト、こちらにもお問合せというページがありまして、そっから送信をしていただきますと、御意見、御要望が、結局は御意見箱と同じところに集まるんですけれども、市のほうに届くというシステムになっていますので、この辺りは改めて、市役所としましても、しっかりと告知、それこそ周知をして、市民の皆様に活用をしていただきたいと考えています。
一方で、市民モニターであるとか、市民との意見交換の場、これまでお話、御説明をしたところなんですけれども、市長と住民の方、市民の方との懇談会もかつてはあったように伺っています。が、なくなったんですね。理由がありまして、収拾がつかなくなったので、やめられたと伺ってます。いろんな事情があったかと思うんですが。
恐らく、議会のほうでの懇談会も私も事務局のほうからいただきまして、拝見したんですが、なかなかこうまとめるのが難しい懇談会なのかなというのは、察して余りあるところです。
従来のあったけどやめてしまったやり方ですね。うまくいかないのは、これ必然だなと感じています。一対多で意見を聞き始めると、聖徳太子じゃないんですけれども、一遍にそりゃ無理です。しかも、意見を言う側の意識がぶれるんですね。要は、せっかくの場なので、何か言ってやろうと、言いたい、聞いてほしいという思いを皆さんお持ちなんですけれども、それがあまりにも方向性がベクトルがいろいろ向いてしまって、分散霧消するんですね。ベクトルというのは、そろわないと力になりません。なので、そろうように意見を聞く。このテクニックが実はコミュニケーションにおいては必要です。
その意味では、この答弁の中で御説明した、ＳＮＳを使った、スマホを使った意見交換というのは、それを突破できる一つの策ではないかなと思っています。一対多の場ではあるんですけれども、その多のほうの意見をうまく集約することができるんじゃないかなと。できるんじゃないかなというのは、私が既に使った経験があるからなんですね。
前職のときに、いろんなセミナーを行いましたが、そのときの講演会の中で実際に話しながらいろんなテーマを取り上げるんですけれども、その聴講をされてる方の意見を絶えずスマホを通して集めます。それに応じて軌道修正をして、最後の質疑応答も同様にスマホを活用することによって、無駄なく、お互いに満足度を高めることができましたので、恐らく近々予定をしている、まだ予定の段階でスケジュール等も確定はしていないんですけれども、その場においても効果的、効率的なコミュ

ニケーションが図れるものと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　昨日も答弁にありましたように、やはり属性を絞ってカジュアルな場をつくっていく。こういったことは、全く異論はありませんし、大賛成です。

我々の雇用主は、やはり市民の皆さんなんです。我々は市民の皆さんに雇われて、しかも顧客がまた市民の皆さんであると。そうすると、やはり市長が目指される世界一住みやすいまちというのは、今日もお話がありましたけれども、いろいろな人がいろいろな意見を持っておると。とすると、当然いろいろな人と会わなければいけない。片方向のいわゆる目安箱的なもので意見を聞くという方法も当然必要でしょうし、あるいはメールなんかもいいと思います。ＳＮＳを活用したものも。

ただ、本来であればやはり顔と顔、フェイストゥーフェイスで話をしていく。そこは一つのアジェンダがなくても、わいわいがやがやで私はいいと思うんです。いろいろな話がたくさん出て、みんなでわいわいがやがやして、結論は出なくてもいいと。要は、今の市長の御自分がお分かりになってないと思うんですが、38歳の市長さんにお会いしたいという市民の皆さんは、たくさんお見えになるわけです。そうすると、せっかくそういうチャンスがあるわけですから、小さい会合でもあれば、どこへでも積極的に飛んでいきますよと。そういったところでお話をすれば、これはかしこまった場じゃなくて、いわゆるカジュアル的な話が年配の方ともできますし、そういった方向で私は進めてったらいいんじゃないかと思うんですね。

いずれにしても、意見を出して、自分たちも参加して理想の町をつくり上げるんだと。そういった意識改革を住民の皆さんにもやっていただかないと、なかなか高齢化が進んで大変難しい課題かもしれませんが、何でも行政に頼るということじゃなくて、やはり自助とか共助とかいったところっていうのは、そういう議論の場の中で参画することで私は出てくるんじゃないかと思うんです。

そういった中で、住みやすいまちというものが一つは浮かび上がってくるんじゃないかと思うんですが、ぜひそういう出かけてって意見を聞くというようなシステムを市長に考えていただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　このコミュニケーションのやり方、場所でしょうか、それについてお答えします。

ほかのところの質問であって、答弁の機会がなかったので、合わせて、せっかくなので御説明をしたいんですけれども、この話をしに行く、挨拶をしに行くというのは、本来は極めて礼儀にかなうものです。が、今

の環境はそうさせてくれません。要は新型コロナがあるので、人との接触を極力抑えたほうがいいというのがあります。

特に8月中は、もう皆さん大分、感覚が和らいでらっしゃるかもしれないんですが、8月中は全国的にさらには広島県内においても、まだまだ感染者数が拡大し続けていたさなかです。その中においては、当然自粛が最善とされた、そんなときもありました。

ただ、今はまた状況が変わってきていますので、そしてこれから先も年末にかけて予断を許さないところではあるんですが、基本的には都合が、環境が許す限りにおいては、積極的にコミュニケーションをとっていきたいというふうに考えています。

私自身もちょくちょくなんですけれども、何というんでしょうか、集まりというんでしょうか、顔を出させてはいただき始めたところです。町中をうろうろするというのは、ふだんもやってる私のフィールドワークではあるんですけれども、これから先もそのような集まり自体がなかなか企画しにくい情勢ではあるんですけれども、それが許される限りにおいては、ぜひとも私もお邪魔したいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　ぜひ、皆さんに住みやすい町とはどういうもんか、聞いていただきたいと思います。

それと、市長先ほどから自分の御年齢のことを言われて、支援者の方も高齢の方もお見えになられますよと、いろいろ自分では若いという部分を打ち消すような言い方をされてますが、市長の今の年齢なら、これから先10年、20年だって、これ30年だって市長やろうと思えば、68歳ですから、30年だってできるわけですよ。先ほど、日系企業の中期経営計画は3年から5年って、今そうですね、まさに。それをこういったことを考えていくと、どうしても4年後の選挙を見据えるような施策になってしまうわけです。

我々も全く一緒になってしまうのですが、やはりそういった世界一住みやすいまちをつくるというアドバルーンを上げられた以上、やはり長期的な視点に立ったビジョンをしっかりと、皆さんにお示しをして、短期で判断するんじゃないんですよと。

これ先ほど、企業のほう3年から5年をいわゆるもっと短くするというようなお話もありましたが、逆に長期計画を立って、いわゆる株主さんに、長期的に支援していただくというような企業の計画の立て方も必要なんじゃないかというような議論も逆にはあるんだろうと私は思ってます。そういった視点から考えると、ぜひ市長には長期的な視点を持って、30年とは言いませんけれども、目標はせめて10年、20年ぐらい持ってやっていくと。それがその38歳という若い市長さんの、私は最も強力な武器じゃないかと思って期待をしとるんですが、最後に意気込みを聞いて、最後の質問にしたいと思います。

○山 本 議 長　　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　　とても熱い励ましのお言葉を頂戴したと勝手ながら解釈をしております。

その上で、このまた斜に構えた私ですので、御期待に沿わない返答になってしまうかもしれないんですけれども、私の思いというのを御説明させていただきます。

30年後の自分というのは、到底想像ができないんですけれども、30年後のこの町というのは想像しています。もちろん当然、世界で一番住みたいまちになっている、そうであり続けている。その町を想像して、今日々職務に当たっているところです。

私のこの職、最初の4年間がありまして、それより先の話。意気込みと言われますと、30年先の町の絵は描いているつもりなんですが、自分自身に置き換えてみると、正直なところ、定まっていません。なぜかというと、この町にとって貢献する方法が一通りではないんじゃないかなと、その思いがあるからです。

2つポイントを上げさせていただくと、まず1つ目なんですが、これは民間の企業は特に言うのかなと思うんですが。経営者の大事な役割は何かと聞かれたときに、人を育てることだと、よく耳にした気がします。だとするならば、一人の人間が長いことそこに居続けるというのは、実は失敗したという厳しい評価も可能なんじゃないかと思ってます。決してすぐ誰かほかの人に、はいよと投げて渡したい、全くそのつもりではないんですけれども、ほかの人に渡せる、要はほかの誰かも同じようにドライブしていく、駆動していけるような、そういう人材をまた新たに生み出していくというのも私の大事な仕事なんではないかと思っています。

もう1つです。今の話に付随するんですが、私がこの4年間でやりたいこと、雑な言葉でお片づけと言ってしまったんですが、本当にその言葉に尽きます。つまり、いろいろとものが積み重なってしまった課題が山積みになってしまったこの町なんですが、一旦、さらっときれいな状態にしたいなと思ってます。その上で、改めてここに何かを築いていく。

極論なんですけれども、私じゃない人間が次、市長になったとしても、やりやすいように、この4年間をかけて土地改良をしたいなと思ってます。誰がどんな種をまいても、収穫が見込める、そんなところまでこの限られた期間ではあるんですが、4年間を費やしていきたいと思っていますので、期間が何年先かというのは、なかなか、すいません。明言が難しいというのが偽ざる正直なところなんですけれども、将来、未来に対しては、このように希望をしっかりと持っているという1点においては、御理解をいただければと思う次第です。

○山 本 議 長　　以上で答弁を終わります。

児玉史則君。

○児 玉 議 員　以上で、私の一般質問を終わります。

○山 本 議 長　以上で、児玉史則君の質問を終わります。

この際、16時15分まで休憩といたします。

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

午後　４時０６分　休憩

午後　４時１５分　再開

～～～～～～～～～○～～～～～～～～～

○山 本 議 長　休憩を閉じて会議を再開いたします。

続いて通告がありますので、発言を許します。

12番　熊高昌三君。

○熊 高 議 員　12番、熊高昌三です。

最後の質問者ということですが、11人の質問者に対して、市長お答えされて、お疲れのようにはないんですが、私のほうが待ちくたびれたような感じで、もうこの、喉までいっぱい言いたいことがたまっておりますので、最後お付き合いいただきたいと思います。

幸い、私の番になると、大体傍聴席が空っぽになるんですけれども、今日は非常に傍聴席にいらっしゃるので、ますます元気が出そうだなという気持ちで質問させていただきますんで、よろしくお願いしたいと思います。

いろいろ昨日から議論を聞いておりましたんで、5時までという皆さんの制約をかけられましたんで、しっかりその時間を守りながらやりたいと思います。いろんな形で聞いておりますので、要点をかいつまんでという形になろうと思いますけれども、まずは第1の政治改革について。

(1) の政治改革の第一歩は、今回の市長選挙で踏み出されたと思いますが、次のステップはどのように考えておられるのか、お伺いしたいと思います。また、合わせて行政と政治の関係をどのように健全化を図っていかれるのかお伺いしたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御指摘をいただきましたとおり、私は元気いっぱいなんですけれども、見渡してみると、かなり疲労の色が濃くなってきているようですので、申し訳ございませんでした。簡潔に答弁するよう努めます。

御質問の政治改革、次のステップなんですけれども、やはり11月、市議会選挙がとても重要だと思っています。この選挙で安芸高田市民の皆様は、より市民として今まで以上に明確な判断が求められるだろうと考えています。

市民の皆様には、私のときの選挙も含めて、いろいろ問題提起をさせていただいています。これからもしていきます。ですので、今までにないほど、市民の皆様には意識高く選挙に臨んでいただきたいと思っています。

そうして生まれた結果、先ほどの話にもつながるんですが、好きも嫌

いも合わせてです。この緊張感が市政には何よりも重要だと思っています。言い換えると関心の高さですね。これをもって、推進力として、いろいろな政策を進めていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　市長がおっしゃるように、市民がいかにこの政治、行政と政治の関係に興味を持つかということで、私は昨日から聞いておりまして、石丸市長の御答弁、そして議員の皆さんの質問、それが緊張感の中にも本当に前向きな議論になっておりますし、あるいはこの雰囲気を見ても、以前の部課長さんを含めて、顔色が全然違いますね。やっぱり、市長が何を言うんだろうかという、半分こわごわとした顔もありますし、でも本当に何か起こりそうだなという雰囲気もありますので、そういったことだけでも、政治改革の第二歩は歩んだかなという気がしています。

そういった意味では、11月の選挙、私たちが今度試されることですが、選挙戦の練り直しをしっかりする必要があるかなということで、できれば市長に寄り添ったような選挙戦になるかなということも含めて、いろいろ皆さん考えておると思いますんで、その点は、第二歩、まず踏み出して、市民に非常にインパクトを与えたということで、私は非常に評価をさせていただきたいと思います。

時間もありませんので、2点目に入りたいと思いますが、これも昨日からいろいろ協議をされておりますけれども、近年の投票率低下に対して、選挙制度を含めてどのように改善すればよいのかということを改めてお聞きしたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきました投票行動、投票率について、お答えします。

大きく分けて2つの整理になるかと思います。

まず1つ目は、有権者に対してどうするかです。これは先ほど申し上げましたが、的を絞って、特にその投票率が低いところ、ここを上げていく政策ですね。例えばですけれども、美土里町の18歳は非常に高かった。その背景をいろいろと深堀してみて、効果的な遡及をしていきたいと思います。

もう1つのほうは、枠組みそのものをこの自治体ですぐにどうこうというのは難しいかと思うんですけれども、できそうなところでは移動式の投票所、さらには国が今考えてくれている電子投票、この辺りも併せて投票行動につなげていければと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　これも具体的なことも含めて、いろいろ御答弁されたんで、そういったことの集約になるんだと思います。

今日も私に関して、インターンシップの学生が来てくれておりますけ

れども、100時間という時間を私とともに勉強するということで、冒頭、市長選挙のときにも市長の事務所、あるいは竹本さんの事務所にも両方行かせていただきました。こんないい機会はないんで、本当に好対称の選挙事務所だったんで、見てほしいということで、見させていただきましたが、そういったことも含めてスタート切ったんですけれども、学生さんたちが非常に熱心にやってくれます。早いときは5時に起きて、こちらへ来るというようなこともしてくれたんです。こっちは9時から始まりますんで。そういった熱心なことを、100時間という時間オーバーして来てくれたということもありますんで。若い人がそういった興味を持ってくれるということが、何より動機づけになると思いますし、これからの選挙制度はいろいろ課題がありますけれども、まずは意識を変えるということで、一つ、つながったんかなということで、これも市長選挙を含めて、こういった政治の場を若い人が見るということで、選挙制度の課題も解決しながら、まずは子供たちの教育も含めて、やはり動機づけを早く、若いときからするということが大事だと思います。

特に、新聞等の読み方次第も、在り方自体もアメリカあたりでは、そこら辺から教育をするというようなことも聞いたことはあります。やはりインターネットの時代ではありますが、そういったことも含めていろんな政治の情報がいかに若い人たちに、最近は民放あたりで、面白おかしくやってるところもありますけれども、それは一つの部分ではあります。本当に政治に対して興味を持てるような形というのは、やはりこういった現場を見るというのが大事だと思いますので、そういったところをさらに高めていただきたいと思います。その辺に関しての所感があればお聞きしたいと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　熊高議員に御紹介をしていただいた大学生の議員インターンシップ、非常に興味を持ちまして、調査研究を始めたところです。ドットジェイピーというところだったかと思うんですけれども、調べてみると、市長インターンシップというのもされていました。ですので、多分お金が発生する、予算が絡む話になるのかなと思うので、その辺りはまた改めて協議をさせていただければと思うんですけれども、他市でやってる例がありましたので、ぜひ可能であれば、当市においても市長インターンシップやってみたいなと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　ドットジェイピーのインターンシップの組織のことも調べていただいとるんですが。ただ、彼女たちは自費で旅費なんかも賄うんですね。私も3万5,000円、その団体に払ってやらせていただいとるんです。そういったことも含めて、いかに意識がないとできないかということもあるんで、市長のはもっと高い費用を出すのかなと思いますけれども、10万ぐ

らい出してあげたらいいんじゃないですかね。

それは冗談ですけれども、そういったことを繰り返すことによって、そのドットジェイピーという組織は全国組織としてやっぱり、投票率なり政治に関心を持とうという、そういう組織ですので、非常にそういったものをうまく活用して、安芸高田市のそういった部分も高めていくということは大事だというふうに思います。

次に入らせていただきます。

2番の行政改革についてということですが、（1）行財政運営の健全化について、具体的な視点についてお伺いをしたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきました行財政改革についてお答えします。

まず、行政の改革のほうなんですけれども、これはとにもかくにも固定観念の突破です。これを改めるところから始まります。これまでやってたからいい、みんながやってるからいい。ではなく、今そしてこれから何が最適かというのを、一旦ゼロベースで検討していくというのが必要な局面だと捉えています。

それこそ、私が最近やっている取組では、呼称の話ですね、呼び方。役職ではなく、さんづけで呼んでみましょうという、非常に小さな取組なんですけれども、行動を変えるためには、考え方を変える必要があります。その考え方を変えるには、環境の変化が必要だと言われます。

実は環境というのは、変えやすい部類です。選択ができるんですね。特にこの市役所において、今市長という立場にありますので、変えられるものもたくさんあるなと思ってます。その一つが呼称、呼び方です。

上下を過度に意識せずとも、仕事ができるようになれば、より自由闊達な雰囲気になり、よりいい政策も出てくる、進められるようになるんではないかと思ってます。

その上で、財政のほうの改革なんですけれども、こちらもこれまでの答弁、その整理になるんですけれども、採算性が悪いのは当然として、いかに持続性を担保していくか。この先もちゃんとそれが残るように、たとえ形が変わったとしてもです。

いろんな理由があって、紆余曲折があったりはするんですが、それでも必要だからそこに置かれた、生み出されたもの、これを続けていくために、工夫をしていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　行財政改革の肝になるのは、やはり市民の理解をいかに取り付けるかということだというふうに、昨日からの議論も聞きましてもそう思っています。

市民の理解を得るためには、何が必要かということを考えたとき、私は正しい情報の開示だと思うんです。はっきり言ってこの12年間、情報

が本当に隠されておりました。そういった課題をずっと引きずってきております。私も何度もいろんな資料、そういったものを提出を求めましたけれども、なかなかまともなものが出てこない。そういったことも含めて、市長がそういうことをやられるということになれば、まず共感を持つためには正しい情報をしっかり出す。特に予算の組み立て、そういったものはしっかりと政策の下から、どうしてこの予算が出てきたのか。道路改良にしても、この順位でこの道路改良をどうしてやるのかということを、市民に明らかにするというところから始まってくるんだと思うんです。

そういったところでいえば、北海道の夕張郡の栗山町、ここは議会改革が一番最初に進んだ地域で、議会基本条例もつくって、昨日ですかね、宍戸議員がおっしゃった、自治基本条例に基づいて、予算の情報をきちっと開示してます。かなり分かりやすい。市民が本当に読みたいような予算書です。

そういったものを今後市長がつくっていかれるべきだというふうに、私は感じるんですが、その辺についての御見解をお伺いしたいと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきました政治の政策の透明性についてお答えします。

私自身が政治の分かる化というのを訴え続けてきているわけなんですけれども、当然、その前段には、見える化があります。情報を極力出していく。段階によっては、まだ出せない。要は不確かなものというのがあれば、それはまだ適当ではないかもしれないんですけれども、基本的にはこのつくっていく段階から、極力開示をしていきたいと思います。

ただ出せばいいものでもなく、先ほど熊高議員が御指摘くださったとおり、分かるように出す。この観点はしっかりと指示をしていきたいと思っています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　分かると同時に、やはり理解してもらう。分かるということですけれども。納得してもらうと言うんですかね。そっちのほうが正しい言葉かと思いますけども、納得できるものをやはり出すということが、前提だと思いますので。

そういった意味では、財政厳しい中で、昨日もいろいろ議論がありました、国からの支援、過疎対策法であったり、そういったものを含めて、やはり、頼らざるを得んということはありますけれども、石丸市長の言葉を借りると、そこに頼り切っておっては駄目だという前提も必要だと思うんです。

私も同感で、いっぱい、うなずくとこがありましたんで、昨日は首が痛くなるぐらい、うなずきました。本当にそういった思いはしておりま

すけれども、そうは言っても現実は厳しいです。

昨日、難しい言葉もあったんですが、合成の誤謬とか、集合の誤謬とか、経済界でよく使われるらしいけれども、日本の国民性からいったら、そういうものがどうしても、そっちのほうに行きやすいんですね。それをどう改めていくかというのは、大きな試練だと思うんですけれども、それについての御見解もお伺いしたいと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　ついつい、また力が入ってしまいそうな御質問をいただいたので、改めて注意をしてお話ししたいと思います。

合成の誤謬というやつですね。みんなが俺が、俺が、わしが、わしが、とやってしまうと、みんな不幸になるという話でした。これは、日本社会はえてしてそうなりがちです。ずっとそうでした。例えば分かりやすい言葉でいくと、一億総中流。私より年下の方だとあまり聞いたこともないかもしれないんですけれども、みんな一緒というのが、よきこととされておりました。今でも、分野によっては、ある面ではそれがいいことであり続けるんですけれども、全部が全部それじゃないねと。言い換えると、今これからの時代は多様性。片仮名使いましたが、ダイバーシティという発想をもっと育んでいく必要があると思っています。

要は、うちはよく言われたんですが、よそはよそ、うちはうちという。この考え方ですね。何て乱暴なと思ってしまうところがなくはないんですけれども、それぞれが違うんだと、お互いを尊重するんだという発想が、きちんとそれぞれが持てれば、日本全体はまだ時間がかかるかもしれないんですが。まずはこの安芸高田市の中で、みんなでこう田の水を引き合う我田引水ではなく、みんなで何かを持ち寄るこの発想ですね。政治であり、政策においても、同じように、この意思の統合していければ、合成の誤謬ではなく、全体最適がかなうと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　今の言葉も含めて、日本人の気質というのは、よく沈没船のことでよく例を言われますよね。アメリカはヒーローになるから飛び込めとかね。イギリス人は紳士だからという。日本人はみんなが言ってますよと。ドイツ人は決まりですからとか。イタリア人は彼女が見てるから頑張りなさいとか。

言い得て妙な国民性だと思うんですよ。そういったことは、国民性として、やはり残ると思うんですよ。そこで大事なのは、今日も議論ありましたけれども、リーダーの覚悟というんですかね。リーダーが本当に正しい、公平公正で正しい方向に持っていけるかどうか。日本の国民性からいうと、そこにかかってると思うんですね。そういった意味でも、公平、公正さをいかに明らかに伝えるかということ。当然、コンプライアンスなんかは、当たり前のことです。その当たり前のことが、この12

年間できてきてなかったんですよ。私から言わせれば。だから、政治に関心を持たないというのは、当たり前です。私たちがどうこうしても、結局どこかで決まっとるんでしょと。それを政治改革も含めてできてきたということなんで、そういった国民性を皆さんうまく引きつけていくというのは、かなり至難の業だと思いますけれども、やはりみんなが一緒に行っていいという方向を見せるというのが、リーダーの役目だと思うんです。

世界一住みやすいまちとかいう言葉も一つかも分かりませんが、今日も塚本議員との議論を聞いてると、なかなかぴんとこんなというところもあったりします。私はそれぞれが好きなものがある、ここには私の大事な人がいる、好きな人がいる、好きな場所があるとかいう、そういった形でも表現できるんだと思います。その辺をどう市民に大多数の人が同じ歩みをしていくのかというところを、もう一つそれこそ覚悟を聞かせていただきたいと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　リーダーの覚悟という大変難しい御質問をいただきました。

一つ、その日本人の国民性というものを踏まえれば、実は今は好機なのかなというふうにも思います。要は、みんながやってますというふうに伝えれば、みんな、お、そうなのかなと思いやすい気質。どういうときに、よく作用するか。いいほうで作用するかというと、危機に対してだと思います。

大変なときに、普通は我先に逃げ出す、好き勝手してしまうんですが、みんなでやらなくちゃいけない、一致団結できるのは、私はこの日本社会のいい特性なのかなというふうに思っています。その意味では、この特に広島ですね。政治で大きな問題が、事件があった。その直後だけに、皆さんの意識というのは、束ねやすい、ある面でですけれども、その局面には、あるように思っています。

その上で、これから先、私自身の思い、発信し続けていかないといけないというのは、そのとおりだというふうに考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　(2) に移ります。

安芸高田市としてのバランスのとれた地域行政を行うためには、どんな手法が必要か。また、効率化と地域性を考慮した持続可能な発展をどう促していかれるのかをお伺いします。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきましたバランスのとれた地域行政について、お答えします。

まず、これまでなんですけれども、インフラであり、公共施設の整備、

これに関しては、地域のバランスというものは、しっかりと考慮されてた面のほうが強いんではないかと思っています。

一方で、この新しい市に、安芸高田市になって、同じ発想では立ち行かなくなっているというのが現状だと思ってます。要は旧6町のそのままのシステムは続けられないという問題点です。

これからどうしていくかなんですが、バランスは常に大事です。これからも取り続けます。ただ、みんながみんな、バランスを取り合って、一歩も動かなくなってしまうと、全部が後退していきます。

ではなく、片仮名使ってしまいますが、トリクルダウンの発想も重要になってくると思ってます。トリクルというのは、しずくが滴り落ちるという意味なんですけれども、トリクルダウンですね。漢字を使えば、ちょっと違う表現なんですが、雁行形態というものがあります。鳥の雁ですね。この三角形、デルタの、三角形の形で鳥は飛ぶんですけれども、要は、真ん中に早く進むものがいるんですね。先陣を切って、後がついていくという体系。これを雁行形態といいます。

実際、導入して実現して成功した例はどこか。世界中にあります。特に、近年成功が目覚ましいのは中国です。10億人を超える人口が集まって、完全な途上国でした。貧しい人が10億人いたんですね。でも、これじゃいけないと、昔の話で恐縮ですが、1970年代、鄧小平という人が、開放経済を始めました。改革、経済改革ですね。そのときに言ったのが、この雁行形態です。みんな一緒には無理だと。代わりに、先に行ける人だけでも、先に行ってくださいと。ただ、その恩恵をしっかり回していってね、回していくよ。この発想で中国は経済大国になっています。

この規模はかなり小さくなるんですけれども、安芸高田市においても、このトリクルダウンですね。全部を一緒にというのがなかなか難しい環境になっていますので、どこか力点を定めてそこから進めていく必要があると思っています。

もちろん、バランスの観点では、従来と言ってもいいかもしれないんですが、どうしても町の中心にある吉田、ここがそのコアになりがちでした。今もそうなってると思いますが、改めてこれは、真の意味でバランスをとる必要があるんではないかと思っています。広く言えば都市計画ですね。そのような言葉も当てはまるかと思うんですが。

それぞれの立地に、それぞれの強みがあるはずですので、それを生かしていきたい。例えば、この前の答弁で申し上げた向原の駅、八千代には土師ダム、高速が近いと。高速は美土里にも高宮にもありますが、それぞれの強みというのを、それぞれ最適化していく。部分最適なんですけれども、そういうバランスのとり方を進めていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　雁行形態にさえ、安芸高田市はなってませんからね。

安芸高田市の習近平になっていくぐらいの覚悟かなというふうに聞き

ました。

私が言うのは、先ほどの議論にもあった、向原なら向原のよさをどう生かすかとか、そういったことを16年前の合併協議会できちっとしてきたんですよ。そのときは、その町の優秀か優秀じゃないかという表現はどうかと思いますけれども、選ばれた若手、中堅職員が出て、本当に我が町をどう生かしていくか。で全体をつくっていくかという議論をして、本当にすばらしいメンバーで私もちょうど議員を高宮町でしてましたから、関わりましたけれども、すばらしいメンバーだったです。

昨日、市長の若手の人材が安芸高田市にはいないというふうな言葉が私は印象に残ってるんですけれどもね。まさにもう16年たってますから、30代の人は、40半ば、一番今脂の乗り切った中堅の職員というのは、ここにも座っておられる人も多いですけれども、そういった人をどう生かすかということが、やっぱりその当時のことも思い浮かべながら、しかし16年たった、市長が言われるように、新しいまちづくりはどうあるべきか。その人たちにもう一度、そのときのことも聞きながら、温故知新ともよく言いますけれども、そこのところの原点をしっかり確認していただきたい。そういった思いがしますが、その辺の経緯は、まだ十分な理解はないんかと思いますが、どうでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　合併当時の様子、状況については、御指摘のとおり、ちょうど私もこの町を離れた、大学時代、2004年でしたので、記憶にもほぼないという状況ではあります。その上で、この古きを改め新しきを知る、この精神、大事にしていきたいと思っています。

幸いなことに、この職員ですね。幹部クラスが並んでいますけれども、非常に皆さん、知見をしっかりと蓄えていらっしゃいますので、私自身は、完全なまだまだ新入社員という状況なんですけれども、ベテランの方々に頼りながら、この言葉があれですけれども、老いも若きも、市役所としてはそうですし、市全体として、市民の皆さんとしても、そのような形で、いろいろな課題に対して、取り組んでいきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　ここの中で地域バランスとかいう言葉を言いましたけれども、やはり合併の原点は住民自治にあったんです。山根議員が本当に力を込めておっしゃっておりましたが、そこが合併のときの原点だったんです。その上で、地域振興会を各町につくっていこうと、そういった流れでここまできたんですが、その途中で、住民自治、そのものの在り方というものを間違った捉え方をしたトップであったと私は思いますから、そこで足踏みをしてしまった。それぞれ地域のしっかりとした形というのを出せなくなってしまったということなんです。

振興会のよさというのは、やはり自分たちの地域を一番よく知ってるんです。私は川根ですが、視察に来られる人からこの振興会をつくるコツは何ですかってよく聞かれるんです。コツはそれぞれの地域の課題を認識できるかどうかでしょ。どんなに人口の多い町でも、課題はあるでしょ。人の関係が希薄だったとか。それぞれの課題を見つければ、そこに向かって、それこそ雁行形態じゃないですけれども、そういう形でみんなが寄り添っていけるでしょ、というようなことを言うんです。

だから、その合併協の原点も見ていただくときに、そういった住民自治の組織ができてきた。50年近く前ですから、このできた経緯というのは。私もその住民自治の背景を持って、議員にならせていただいたんで、それが原点ですから。そういった政治と住民自治というのは、行政とも一緒につながってきたという経緯がありますんで、そこらをしっかり確認をしていただきたいというふうに思いますが、いかがでしょうか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　住民自治の成り立ちについてなんですけれども、御指摘のとおり、しっかりとそれを踏まえて確認して、いろいろな物事を検討していきたいと思います。

今御指摘のあったとおり、とにもかくにも目的意識だと思います。何をするのか。何をするための集まりなのか。それを見失ってしまうと、どんな組織もうまくいかない。会社もしかり、市役所もしかりだと思っていますので、かなり普遍的な話だと思ってます。

引き続き、この市政、あらゆる場面で目的意識を明確にして、進んでいきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　まだ市長が生まれる前の話ですから、しっかり確認をしてください。

次に移ります。

3番の所信表明の「3.個別方針」についてということで、これは問い方が非常に難しい問い方で、答弁にも困られると思いますけれども、個別に1から7について、昨日から聞いたこともありますんで、はしょる部分も多少あると思いますけれども、個別にまだまだ聞きたいことがあるというところで出しておりますので、お答えいただきたいと思います。

○山 本 議 長　ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　御質問いただきました、この所信表明の個別の方針なんですけれども、そのキーワードが出た瞬間、皆さんの表情が曇りましたので、慎重にお話をしたいと思っています。

この資料は公表もされていますので、またお手元に取り寄せいただければと思うんですが、全部で7つ、順番に大事なほうから、危機対応等々があります。教育、医療福祉、介護福祉、生活環境、産業、6番目

に文化・芸術、7番目、多様性で締めています。

全てに共通するのは、最適化です。これまでの惰性で、続けてはいけない。そこに尽きると思っています。特に、改めて少しだけ力を入れさせて、お許しいただければ力を入れたいのが、実は7番目です。

多様性。片仮名でダイバーシティです。ぜひこのダイバーシティというのを、この市においては、これ以上片仮名増やすというお叱りもあるかもしれないんですが、大事なキーワードとして、これから先大事にしていきたいと思っています。多様性。

狭義においては、アメリカなんかで話題になっています。人種の問題だったり、マイノリティ、ＬＧＢＴと呼ばれる人たち、この人たちを当然のように受け入れないといけない。受け入れる社会にしようという発想なんですが、その人個人の問題に限りません。組織においても同様だと思います。多様性。

いろんなものがあっていいんじゃないの。いろんなものになれるんだよと、この発想は、この前のところで、教育でもいろいろとお話しましたが、ぜひこれから先、これからの未来社会を生きていく子供たちに伝えていきたいポイントでありますので、この7つの中で、特に力入れて、許していただけるんであれば、この7番目、ダイバーシティというのをしっかりとこれから先、皆さんにお伝えしていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　私も7番から行かしていただきましょう。

ダイバーシティ、当然、今の社会、本当にそこが大事だというふうなことがありますし、そうは言っても、今のアメリカの黒人暴動の問題も含めて、本当にこれまでやってきたことが、どうだったんだろうかというぐらいの人種差別の強烈な状況です。これもやはりリーダーの課題もあると思います。台湾の問題にしても。

だから、私たちは、こういった田舎の市に住んでおりますけれども、そういったことは非常に関心を持って私たちのほうからでも、もっとしっかりするということを訴えるべき状況であると思います。

それに関係して言えば、外国人の労働者の皆さんがここにも書いてありますけれども、たくさん来ていらっしゃいます。それも含めて、社会増という要因にもなってると思います。だから、働く人は今、コロナ禍でどうなってるかというのも非常に気になるんですね。そこら辺が何か数字があれば聞きたいというふうに思います。

やはり、基本的に、その外国の皆さんが労働者としてだけというのが日本の国の法律の問題もありますけれども、そこのところを一緒に生きる人間として、住む人間として、やはりそれこそ、世界一住みたいまちだから安芸高田市に来て働くんだという、そんなふうになってほしいというのが私の理想なんです。その辺について、まずお伺いしたいと思います。

具体的には、コロナ禍で外国の皆さんがどうなってるのか、ということもちょっとお聞きしたいと思います。

○山 本 議 長　質問の途中ですが、お諮りいたします。

本日の会議時間は都合により、延長したいと思いますが、御異議ございませんでしょうか。

（異議なし）

○山 本 議 長　御異議なしと認め、本日の会議時間は延長いたします。

続いて、ただいまの質問に対し、答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　多様性に関する御質問にお答えします。

この日本における、安芸高田市における外国人の方の存在、主にはお仕事で、お越しいただいてる方がほとんどなんですけれども、経済という意味においては、もちろん大事なんですが、市民、その地域の住民にとっても、とても幸いな機会だと捉えています。なぜか。

日本に生まれて育つと、多様性が割と少ないんです。海外、外国というのは、分かりやすい多様性、その宝庫だと思ってます。何より、私が海外に住んでみて、一番よかったなと思うのは、自分が外国人になった、その経験です。異国の地で、生活をする、仕事をすることが、何と大変なことか、それを知れただけで私は行った価値が十分にあったな。私の人生は、随分豊かになったんじゃないかな、そう思うことができました。それを幾らかでも、部分的にでも、この町にいながら再現できる。その機会が外国の方との接点になるのではないかと考えています。

実際の具体的な数字に関しては、担当部長のほうから説明があるかと思います。

社会増プラスマイナスの流入の数字があるかと思うんですが。

○山 本 議 長　続いて答弁を求めます。

市民部長　宮本智雄君。

○宮本市民部長　失礼します。突然のことで戸惑っておりますが、今市長のほうからもありましたように、当市はここ2年間、社会増という実績を上げておりますが、これは中身を分析しますと、外国から日本へ、安芸高田市へ来られた方の流入の増が要因で、2年間連続でなっております。

ただし、今年度はコロナ禍のために、入国が制限されておりますので、現在では宿泊施設等も今整備をしておりますが、そちらのほうも充足率が今7名程度しかおられないというような状況になっております。現状では、新たな方を受け入れておりませんので、全体でも安芸高田市内ではマイナスとなっております。

詳細な数字につきましては、現在持ち合わせておりませんので、申し上げられません。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　傾向で大体分かりましたんで、数字的な、詳しいことは、またいずれ

機会が、報告する場もあると思いますんで、そこでお願いしたいと思います。

要は、働く人として、来ていただいとるという方をどんなふうにして本当に住んでいただく人になれるんかという。法律の壁が大きいですけれども、今は。でもそういうのを、それこそ私たちも委員会で滋賀県の湖南市に行ってまいりましたけれども、やはり外国人の皆さんをいかに手厚く市民として扱うかというようなことを、先進的な地域もありますので、そこらも含めて、以前にもここでも言いましたけれども、そういったところを参考にしながら、やはりせっかく来ていただいた外国人の人を本当に安芸高田市に住んでよかったなという人にしていく取組を市長、行っていただきたいというふうに思います。

もう一つは、コロナ禍の状況の中で、外国人の人が生活困窮という状況もあると思うんで、これ以上そこは今日は問いませんけれども、そこら辺もいろんな配慮をされとるんだと思います。そこまで手厚く見守っていかれることが、やはりそういったことにつながると思いますので、多文化共生の皆さんもしっかり関わっていただいておりますので、そこらが状況を見ながら、市長が手が打てる部分があったら、手早く打っていただきたいということを要望をしておきます。

時間も5時までということになりましたが、もう1点だけ。

5番目の産業の部分で、農業とかそういうことを含めて、産業ですから、これもいろいろ幅広いんですが、1点に絞って言います。

先般、産業建設常任委員会の勉強会をやりまして、部課長さん、市長も少しの時間でしたが、参列いただいて、ちょっと関わりを持っていただきましたが、今日もいろいろ議論をされていた獣害対策。私も10年来の政策の一つの大きな柱として獣害対策は山の整備だということにかけて、これまでやってきました。

その仕組みづくりをやっと民間の手でできそうなということを、この間勉強会として行ったわけです。抜本的なことは、大学の人と関係するというようなこともありますが、大学もいいと思いますけれども、もう既に現場でそういう動きが出てる。大学の皆さんが悪いと言うんじゃないですけれども、大学の皆さんは研究で、それをどう生かすかというのが行政です。そこの部分がもう通り過ぎて、次の段階に山の部分がきてますから、そこの部分をどんなふうに生かすか。今の資源循環型、ＣＯ2の削減の問題。今日も言われましたけれども、全てがつながってるということなんですね。その山をきれいにすることによって、それが資源化され、あるいは道路沿いの樹木を切って、それが今まではごみとして処理をされていたものが、そういう仕組みをつくると、資源として、バイオマス発電の材料になって、エネルギーとして地域に還元される。

そういう仕組みを民間がつくってやりましょうというふうな計画を話してくれたんですが、そういったところをまだ途中の段階ではありますけれども、どういうふうに受け止めておられるか。まずはお聞きしたい

と思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　今御質問をいただきました、循環型社会、持続性、持続可能性の高い社会というのは、これから先、非常に重要なテーマだと認識しています。

その上で、少し答弁でも述べましたが、エコではあるんですけれども、エコロジーはあくまでも、エコノミーのため、という視点は、私は大事だと思ってます。要は、無理をすると、続かない可能性が高くなるんですね。その意味では、経済を大事にしながら、環境に配慮していく、そういうバランスをとっていきたいと思ってます。

実際、国が掲げているゼロカーボンという目標もあったかと思うんですが、結構先の年数が掲げてあったように記憶しています。その意味では、最終的な理想はしっかりと高く掲げてあるんですけれども、それに至る道というのは、なかなか長く険しいものなのかなと認識していますので、それに近づけるよう、バランスをとりながら、検討を進めていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　石炭の火力発電所をしながら、ゼロカーボンということもないだろうというふうに私は思います。

エコノミーということをおっしゃいましたけれども、まさに木質バイオマス発電というのはエコノミーですよ。エコノミーを優先して、その結果、山の木を伐採をして、また植えてという、20年サイクルで重ねていく。昔の炭焼きの時代、市長は若いから御存じないかも分からんけれども、私たちの地域は薪炭産業で成り立った時代ですから、本当にそういうサイクルが今の新しい仕組みに変わっただけだと思います。エネルギーが、その炭から電気に変わる。それだけの違いだと思うんで、それを民間がやろうと。行政が何をやるべきかというのは、市民の啓発です。森林法が去年変わって、その森林の整備をしやすくしたというのも、やっと国もそこまで動きが出てきたということです。林野庁も含めて、そういった方向に動いてきたから、今のような売電価格の問題も含めて、いろいろ経済につながっていったということなんです。

だから、安芸高田市の道路沿いの倒木の問題、あるいは一番は獣害の問題ですけれども、最近は熊もたくさん出ますけれども、それは季節の問題もあります。やはり山が荒れて、自然の生態系が崩れている。植生も崩れている。そういうとこから、熊の生態が変わってきたということも大きな要因なんですね。

そういったことを安芸高田市が先頭にたって、前の市長は一番が好きでしたけれども、石丸市長もいいことは一番でやっていただきたいと思います。そのチャンスがきたと思うんですね。具体的に、早くやっていただきたい。獣害対策を防ぐには、もう私はこれしかないぐらいに、い

ろいろ状況見てますので、その取組をどうされるかというのを、ちょっと確認をしておきたいと思います。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　この獣害対策と、循環型社会、経済、これが両立されるとするならば、これほどいいアイデアはないというふうに思っています。

ですので、後はその実効性ですね。どれだけその話に、計画に、リアリティがあるのか。その1点で検証を進めていきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　明快な答弁ですから、そのように取り組んでいただきたいというふうに思います。検証するという、実証したところも随分ありますので、そこら辺のことをきちっと聞き取っていただければ、正確に判断ができる状況というのは、出ようと思います。

市民の皆さんの意識を変えるというのが、そこでは一番大きな課題だと思うんです。市民の意識を変えるというのは、もう皆伐をしたら、山が崩れるというような意識もあるんですね。それは基本的には間違いなんです。

そういったところから意識改革をしていかないと、その原因は作業道をつけることによって、そこが水路になって、崩れていく。そういった状況で皆伐はまずい、木を切るとまずい。白木のほうは、あそこのブルーのシートをかけてありますけれども、あれは県が補助をして木を切って、作業道をきちっとしてなかったから、そこに水が流れて、間に入って地滑りを起こした。そこに何千万もかけてボーリング調査をして、そしてさらには下に家がありますから、防災のために何億もかけて復旧をするという、本当に税金の無駄遣いも甚だしい状況があるんです。

正確な情報で、正確な取組をするということが大事なんで、そのためには行政が先頭に立って、正しい情報をきちっと捉えて、進めていくという。

当然、森林組合さんあたりも、重要な役割を果たしていただくと思いますので、そこら辺を本当に素早く、やっていただきたいということを改めて確認をしておきたいと思いますが、再度、御答弁いただけますか。

○山 本 議 長　答弁を求めます。

市長　石丸伸二君。

○石 丸 市 長　今御質問をいただきました、正しい認識ですね。これ私も非常に大事だと思いまして、何度も主張してきたところなんですけれども、客観的な事実に基づく判断、もう徹底的にこれを追求していきたいと思います。

片仮名なんですけれども、ファクトフルネスという本がはやっていました。まさにそれの考え方がこれぐらいのページで書いてある本なんですけれども。えてして人は思い込みで、特に自分が安心しやすいように、事実を解釈する嫌いがあります。情報が限られていれば、足りないとこ

ろを勝手に補いますし、多ければ多いで、好きなものだけえり好んでしまう。これは非常に難しい、悩ましい問題なんですけれども、解決するには情報を発信する側の工夫だと思ってます。要は、相手がきちんと受け取れるような、ちょうどいいボールを渡してあげる。この発想でこれからも情報発信に取り組んでいきたいと考えています。

○山 本 議 長　以上で答弁を終わります。

熊高昌三君。

○熊 高 議 員　私がちょうどいいボールをまだ投げてないんだろうなという感じがしましたけれども、もっといいボールを投げるようにします。

まだたくさん言いたいことはありますけれども、児玉議員が30年先までを市長にとって、一つのまとめを私の前にしましたんで、私はこれくらいにさせていただきます。

ありがとうございました。

○山 本 議 長　以上で、熊高昌三君の質問を終わります。

以上で、本日の日程は終了いたしましたので散会いたします。

次回は、9月30日午前10時に再開いたします。

御苦労さまでした。

～～～～～～～～○～～～～～～～～

午後　５時１２分　散会

地方自治法第１２３条第２項の規定によりここに署名する。

安 芸 高 田 市 議 会 議 長

安 芸 高 田 市 議 会 議 員

安 芸 高 田 市 議 会 議 員